

---

# ～ 猫被り姫に魔王退治の王子様 ～

かとう みき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

〜猫被り姫に魔王退治の王子様〜

### 【Nコード】

N6208X

### 【作者名】

かとう みき

### 【あらすじ】

東国の姫が魔王に掠られた。婚約者の王子は姫を救うべく魔王退治の旅に出たが…、魔王は東国を統べる王に外ならず、仕来たりとして形だけの魔王退治の旅なのか、本当に姫を取り返したいのか、最後迄目的に迷う。魔王と姫の両方を救いたいと云う旅の道連れも出来て、王子は姫に恋をして自分の気持ちも不安定になる。

（王子BL注意、かけらも受け付けない人への警告に過ぎず、好きな方の場合は期待に応えられません。……が、ゴメンなさい少しだけ不埒な事します…（<―>））

姫我慢してるのに……

完結予定日：2011 12月中旬…最悪年内ですが多分中旬で  
平気かと。

## 1話 猫被り姫（前書き）

この頁を開いて下さり有り難うございます。  
最後迄お読み戴けたら嬉しいです。

女神と、魔王？と、剣と魔法

当たり前に出て来ます。

世界が違うので、違う言葉が有ります。

異世界も、神や魔法使いならば跳べてしまうので、  
同じ言葉も有ります。

この話の誤字脱字は雰囲気ぶち壊しなので、かなり気をつけてますが……発見しては修正しております。残ってたら……申し訳ございません。

造語をちりばめているので、え？と思われましょうが、作品内にて殆ど説明が入る筈です。

見逃しが有りましたら、完結後のご指摘を戴けますと有り難く存じます。

少しでもお楽しみ戴けましたら幸いです。

正直、カレラの年齢には触れないで下さい……的な……、登場人物率が高いです。

そもそも人間では……等と云い始めたら、話が進みません。  
カレラも恋をします。

しかも、すっかり熱烈なのをしたら国を巻き添えです。  
一途に熱烈な恋をする魔王を、どうか見守って下さい。



## 1話 猫被り姫

何から話そうか？やはり最初は私の国の話をしようか？

絹の国と云う。東の歴史有る国だ。

セリカの名に相応しく、優しく穏やかな空気はまさしく絹の肌触りのようで、季節は常春。過ごしやすく美しい自然。美と香りを楽しませる花を咲かせる木々。その自然の美しさ同様に、雅やかな文化は派手さには欠けるが、歴史に裏打ちされた確かな自負を、貴族だけでなく民が誇るに足るモノだ。

寧ろ華美な南の文化等は軽侮の対象に近い。端的に云うならば、物柔らかに見えて自尊心が高い国民性、とも云える。

歴史と美を誇る国。

セリカの謂れは古く、もはや確かな伝承も失われて久しいが、春の女神アランナが名付けたとも、月の女神リア・リルーラの記憶の泉から生まれた国だとも伝えられている。

だからだろうか？

セリカの王族からは、リアに仕える御司が産まれる事が多い。しかも。リアたるリア。リアの中のリア。リア・リルーラに。

それがどれ程の光栄か、どれ程の名誉か、そしてどれ程に、人として、普通に居られない事か……勿論、女神には解らないだろうし、

解るつもりもナイとも思う。

女神だから仕方ない。

人に関われば狂うからと、関係せずに居ようとか、そんな思いやりを見せてくれたり：なんて事は、期待してはならないのだ。

女神の榮譽に浴する王家。

私は、その美しいセリカに相應しい、美と知性を誇る姫として育った。

他国にまで聞こえる、セリカの姫の素晴らしさは、私の努力のたまものと云えよう。

そんな私にも嫁ぐ日が来た。これ以上比ぶべくも無い好条件。西の大国、クルトの第一王子だ。

富める国クルト。それだけでも魅力だが、私の美貌をもってすれば、他にも相手は居る。彼は第一王子であり皇太子でも有る。そして今現在、彼の国に他の王子は居ない。クルトの国は王家の力が絶対的で、財も有り余る程だ。そして親族が少ない事は、対抗出来る程の敵が少なく、財の目減りも少ないと云う事でも有る。

我が国も王家の発言力は強く民もそれなりに豊かだが、王家の財力は些程ない。

貧乏と迄は云わないが、有事の際に困らないとはお世辞にも云えない。

大国クルトの結納金は魅力に満ちて、私の心を彼ノ国に惹きつけた。





## 2話 花嫁の独り言

美しい王子の名をヒリスと云う。妙な名だが、それさえ美しく感じさせる王子の絵姿では有った。例え半分でも、この絵の通りに美しいならば、それなりの愛を育めるだろう。

私はそう思い、この結婚を選択したのだ。

勿論。

私に対する愛は問題ない。他の姫君方とは違い、私の美しさは絵姿に画けるものではないからだ。

時に、絵姿と違うと問題になり、国に帰される姫が居る。誰とは云わないが、南国のさる小国の姫がそうだった。嫁ぎ先の我恵那王子とは夜会で一緒にした事が有るが、その時の彼は大層悔しがって居たと聞く。

彼は、私と彼女の絵姿を比べ見て、彼女に求婚したのだ。

絵より美しい私を知り、絵に遠すぎた彼女を思い出し、彼は上品とは程遠い罵りを口にしたと云う。

けれど、その時には既にヒリス王子との縁談が進み、彼の力でもどう仕様もなかったのだ。容色のみで女を判断する阿呆に、相応しい結末では無かるうか？

騙される莫迦に居て貰わないと、私の努力の成果が半減するが、ああ迄愚かしい者を見るのもまた不快だ。

勿論、王族に生まれて、容色に興味を持たないのも困りものでは有るし、仕方ないのかも知れないが。

王族にとつて、美しさは義務みたいなものだから、当然、縁談の相手にも美貌を要求される。

美しさは国の象徴に相応しい。窓口にも相応しい。

崇めて貢がれる存在としても相応しい。

尊敬する言動も、美しいなら尚更有り難く感じてくれるモノなのだ。王族は美しく在らねばならない。

容姿も、行動も。

美は力だ。神に列なるチカラ以外にも、やはりある種の力を持つ。人間のそれは、多少即物的ではあるけれど。

私の美しさもヒラリス様の美しさも、そういう意味では非常に役に立つ代物だ。

セリカにとつても、クルトにとつても、喜ばしいこの婚礼は、調度十日前に挙げられる筈だった。

筈、と云う言葉からも解る様に、未だ式は挙げられていない。何故かと云えば、花嫁たる私が盗まれたからである。

十五日前の私は「明日はヒラリス様にお逢い出来る」と心弾ませて居たところを、悪い魔法使いに掠われたのだ。

冗談みたいな話だが。笑い事ではない、私にとっては、最大の悲劇である。

と、思ったら「悪い魔法使い」はヒラリス様の絵姿よりも余程美

しい男で、私は少し気を良くした。

「貴女を誰にも渡したくなかったのです。」  
愛を打ち明ける彼の言葉も、心地良かった。だが、しかし、どんな甘い声も美貌も、所詮ヒラリス様のもたらす財力には及ばない。

私が、セリカの姫として、誇り高く貞節に努めたのは云う迄もない事だろう。

### 3話 出発

此処は西の大国クルト。

国王夫妻が表情を固くして、心配を隠せない様子だ。

「まだか!？」

青い顔で、王が声を荒げる等、滅多に有る事では無い。だが今の王は、傍らの王妃が今にも倒れそうな様子にも頓着出来ないで居る。何故なら、待ち詫びた王子の花嫁が、国境を前にして掠われてしまったからだ。

彼等はセリカの姫の行方に関する報告をずっと待っていたのだ。

魔女や兵士を始めとして、ありとあらゆる人々が、ありとあらゆる方法で、姫を探索していた。

そして、その指揮をとるのは、嫁盗人の被害者たるヒラリス王子であった。

「父上、余り周りの者に当たらないで下さい。」

クルトの唯一の王子にして神々に愛されたヒラリス王子だ。

「ヒラリスか…どうだ?何か解ったか!？」

気難しい王の表情を和ませたのは、何も王子が唯一人の息子だからだけではない。

ヒラリス王子ならば何とかすると信じればこそである。

クルトの民は知る。王子はあらゆる神の寵愛を得ていると。美と芸術の神、知の神、武の神にも愛され、剣の技は天才の名を欲しいままにしている。

どこの国より富み、どこの国より強く、民も豊かで倖福に暮らして居るが、人はそれだけでは満足出来ない。

クルトが何より望むモノ。

それは歴史、文化、芸術、はつきりと言葉や形に表すのが難しい、美の中に有る。

文化的でないとは云わない。クルトの民自身思ったりはしない。けれど、芸術を誇る国を、歴史の深い国を、どこか羨まずにはいられない、それがクルトの国民性なのだ。

文化も芸術も何処か借り物に等しいこの現状こそが、クルトの悩みだと云っても良い。

美と芸術の国セリカの姫を娶る事で、その不満もかなり解消される筈だった。

いや、解消されなければならぬのだ。

王はそう思って、王子に尋く。

「何処に居るのだ、姫君は？そして、掠った魔女はどこ者だ？」

王子は応えた。

「東の森の………魔王のようです。」

「黒の王子か！？」

そんなバカな？と、王は激昂し、王妃は意識を手放した。

それだけ手強い敵で有った。

普通なら敵にはならない相手でも有る。

黒衣を纏った魔法使い。東の森は魔物さえ近付かない禁断の地だ

った。

行って戻って来たらそれだけで 目的地に辿り着けず迷い出ただけでも 倅運だと云うくらい。禁断とは聖地の証でも有り、聖地を破る者が赦されないのは当然とも云える。

だが、例え禁忌を破ろうとも、王族として為すべき行動が有る。

だから、王妃は王子がそこに行く姿を想像しただけで気が遠くなつたのだ。

「行くのか」

王妃が侍女達に運ばれて、広間から去った後の…第一声がコレで有った。

王子は一言。

「はい」

「そうだな、そうでなくてはならん。だが……」

王の眸には絶望と哀しみと希望が有った。

複雑に絡み合う感情を抑えて、王は告げた。

「行くがよい。クルトの名誉の為に。そなたの誇りの為に。そして、彼の姫、美の女神の娘たる硝紫黎蘭花姫の為に!？」

仕来たり通りに、口上を述べ、右手にて指し示す。東の方角を。

ヒラリスも仕来たりに従って礼を取り、姫君救出の旅に出る。

シヨウシレイランカ姫、5つの名を正式に呼ばれる事は滅多に無いが、それでも2つ名で呼べるのは彼女を『持つ』者だけだ。今迄は、彼女の両親。セリカの国王夫妻。今となつてはヒラリス王子のみが許された呼び名。

「はい、必ずや。次にお目にかかる折には、紫蘭姫と共に!」

そして王子は出発したのだ。

魔の森へ。

東の森へ。

黒き王子の治める領地へと、彼は姫君を救出すべく、冒険の旅に出た。

#### 4話 姫君の本音

王子が冒険への出発を遂げた頃、黒の王子に掠われた姫はと云うと。

魔法使いの高き塔にてため息をついていた。

窓から月を眺め、彼女は月よりも美しい姿を哀しみに沈ませて…  
…いた訳でもない。

美食もドレスも宝石も、望むだけ出て来る。いや望まずとも、姫君を美しく飾り立て、黒の王子は倅せそうに彼女を見つめる日々である。

心細かいかと云うなら、それもない。

「燕夜？燕夜っ」

姫君の声はどんな楽士が出す事も敵わず、どんな音楽よりも美しい。呼ばれた男はふわりと姫の傍らに降り立った。

魔法に慣れた姫は云う。

「退屈だわ。」

素っ気ない口調に声、冷めた眸に表情、掠われた身で、当然と云えば当然だが、姫君は何ら温もりを与える事をしない。

冷やかに、誇り高く、己を掠って来た魔王を、けれど躊躇なく呼びつけるのだ。

魔王は喜々として従う。

姫から向けられるものならば、冷たい眼差しさえ黒の王子を魅惑



する。

「では音楽でも」

「飽きたわ」

「ならば新しい宝石を」

「宝石で退屈が紛れるとでも？貴方はどこまで莫迦なのかしら？」

柔らかい口調で笑みを含んで紡がれる、姫君の容赦ない言葉も、

黒の王子を惹き付ける材料にしかない。

「わたくしはね、何か面白い、目新しいモノが、欲しいの」

「例えばどんなモノですか？」

当然だが、その質問には冷ややかな眼差しが返される。

黒の王子の名にしおう、闇色の髪と闇色の眸が、白い肌に映える。神秘的で美しい王子。

東国の名を持ち乍ら、黒の色彩は北のもの。そして肌は西と東の融合した、滑らかな陶磁器の白。

年若い娘が、この美々しい若者を前にして、ましてや日々崇められ、こんなにも熱を持った眸で見詰められ、心が動かない訳もない。

紫蘭も結局は初心な姫君だった。例え、相手には決して覚らせなかつたとはいえ。打算に依る結婚を、自ら進んで選び取つたとはいえ。そして、此処でも、心に打算がひしめいていたとはいえ、結局は初心な小娘の心を、捨て切る事は出来なかつたのだ。

例えば、財産がクルトに匹敵しても、よしんば、勝る事が有つても、西の大国を敵には出来ない。

ヒラリス王子が紫蘭花姫を諦めない限り、紫蘭の立場から黒の王子を選択する事は出来ない。

それでも、夜の眸に凝視られる事を、嬉しいと想う自分に気付いてはいた。

気付いたからと云って、何が出来る訳でも無い。唯こうして…退屈を口実に呼び出したり、悪態をついたりして、振り回してみたりがせいぜいだ。

燕夜はいつも、彼女の為に様々な趣向を用意してくれるので、城に居る時よりも楽しいくらいだった。

楽士を呼んだり。

芸人を呼んだり。

時には、夜の空を燕夜は姫君を抱いて飛んだりもする。

城に居た時よりも、行動には自由が有る。とは云え、城での生活の不自由さは彼女が選択したものだ。

良き姫。素晴らしき姫と呼ばれる為に、その名に傷がつく様な事は避けて通って来たのだ。

穏やかで優しく、思いやり深く、誰より美しい。賢く、誇り高く、近寄り難い程に高貴で、けれど高慢さは露程もなく、見つめるだけで倅せになれる様な、そんな姫。

そんな評判を守っていたのだ。抑圧も半端ない。

沢山の男を袖にはしたが、誰一人として、彼女を悪く云う者は居ない。

確かに彼女は賢明で、必要以上に偉そうな女は敵を作ると知っていた。

特に彼女が慎重に優しさを振り撒いたのが、女性陣相手なのが証

扱のひとつだろう。

男の恨みを捻り潰すより、女を敵にした方が余程体力と根性が必要なのは当然と云うものだ。

それでも彼女は楽しかった。敵を避け、味方を作り、人を操り、政治のゲームに興じる事が、多分何より彼女を楽しませていたのだ。

夜会の席で、さりげなく動かす政治の駒に彼女はゾクゾクする程の快楽を覚えた。そして、彼女のその性質 勿論、性格では無いの一端を知る王と王妃は、彼女をとて頼もしく思っていたのだ。その国王夫妻にさえ、彼女は本音で接して居たとは云えない。

だから彼女が、自らの本音を曝し、その性格を顕らかにしたのはこの塔に来て初めての事でも有った。

長い間被って来た仮面を外す事は、例え望んで演じて来たとは云え、一種の爽快さを彼女に感じさせたが、それは当然の事だったかも知れない。

彼女の企み好きな性質は、一介の村娘に生まれたとしても、平凡な一生に倖せを感じ取る事は難しかっただろうが、それでも娘らしい恋心に無縁と云う訳でも無かったのだから。それは結婚相手の容色に、必要以上にこだわる事からも知れる。

退屈だと云えば彼は来る。いや、名を呼ぶだけで充分なのだろうが、彼女は理由が欲しかった。

云い訳、と呼ぶべきだろうか。

だが、そんな自衛の手段よりも、自分を喜ばせる為に懸命な彼を見るのが嬉しくてたまらない。

何とも業だなあと思いつつも、姫君は冷ややかに彼を見遣る。その美貌に、熱い眼差しに惹かれ乍らも、それを表現する事が許されない。

自分の立場を生まれて初めて腹立たしいと感じた。

「それを考えるのが、貴方の役目だと思っただけけど…役立たずにも程が有るのでは無くて？」

「申し訳ございません、姫君。例えばセリカの城で、どんな事が貴女の楽しみだったか、どうか愚かな私に、お教え願えませんか？」

悩ましくも夜の眸が煌めき、怯みそうになるのをグツと堪えた姫君である。

くっ、と喉を反らし、自然に、冷やかに、腰を低くした黒の王子を見下して、仕方ないわねと言葉を綴る。

「そうね、夜会が好きだったわ。城ではそれが一番楽しみだったかしら。」

正確には巧妙に政治的手腕を發揮するのが、彼女に快い緊張感と満足感を与えていた。

それは普段の生活でもそうだったが、決して覚られずに立ち回る事が、逆に彼女の心を解放するのだ。

「陰謀と打算。欲に満ちた罫。」

ゆったりと笑みを浮かべ乍ら、それらが今迄通り愉しませてくれるかは疑問だが、と彼女は思った。

勿論、それらの政治ゲームに対する気持ちを霞ませたのは、この美しい黒の王子に出逢った所為に外ならない。

「貴方は楽しくなかったの？」

「そう…ですね。楽しくなかったと云えば、嘘になる。けれど、そんなものに構けていたから、私は…大切な家族を失った。」

そう云って燕夜は淋しい笑みを浮かべた。

静かに穏やかに微笑み乍ら、彼の眸には空虚な色が有った。  
殊更に哀しみや苦悩を見せる事もせず、だからこそ見る者を切なくさせる色彩だった。

「梨那季亜さま、と云ったかしら？ 弟君は。3代前の主の、妾腹の王子でしたわね。お祖父さまは、貴方の大切な家族には含まれなかったの？」

「景影か。いや。愛しい弟だったのは確かだ。けれど、季亜は誰より大切だった。あれが死んでから、私は自分の罪に気付いたのですよ。」

祖父の兄である美しい王子の哀しみに、紫蘭姫は首を傾げた。自嘲さえ出来ない程の罪が、燕夜に有るとは思えなかったのだ。

「どんな罪ですか？」

「誰も、……妻も、両親も、弟達も。誰の事も、本当には愛さなかった罪です。」

「……でも、貴方は梨那季亜さまを愛されたのではなくて？ それこそ、王位を継ぐ立場を捨てて、此処にお籠りになった。」

誰よりも、そう、歴代の王の誰よりも素晴らしい王になると謳われた男。なのに弟の為に、その美貌と才を隠したのでは無かったか。

「あれの事さえも、本当には愛さなかった。それに気付いて、初めて愛しかけて、余りの遅さに……私は自らを棄てたのですよ。」

「燕夜……」

時を留めた王子の嘆きは、素直に哀しむ事も出来ない程、深く捻れている。

梨燕紫夜蘭。リエンシヤランと云う名の、セリカの伝説の人物は、こんな所で、別の伝説になって居た。

黒の王子。魔王と呼ばれる男として。

「何だかわからないけれど、どうでも良いわ。」  
彼女は色々と言いたい事をグツと堪え、努めて詰まらなそうに、あつさりと言った。

過去より、現在や未来が良い。この人の哀しみより笑顔が良いと紫蘭は思った。同じ名を持つ男に　この男の名を貰ったのだから当然の事だが　、初めて愛を教えたのが自分だと云うなら、彼に笑顔を与える事が出来るのも、また己だけだと今の彼女は知っていた。

この数日で知ったのだった。

「そうですね。夜会とはいきませんが、祭が有るようですよ？」

「そう？空から眺めて見たいわ。散策に出ましよう。」

「御意のままに、美しい姫君。」

白い手に口付けて、夜の眸が熱を帯びる。

愛さなかつた弟に、愛してくれた弟に、孫として彼女が産まれて来たと言った時、彼は何を思ったろう？

何気なく水鏡に映し出した祖国の地で、少女は美しく賢く育った。そして、その行動が自分に似ていると知った時には、既に誰よりも深く愛していた。

誰にも渡したくないと思った彼は、己と同じセリカの王族としての価値観を持つ少女が、何処の国を選ぶかを知っていた。  
きつと、と、思い。

クルトの国に至る道に、罨を、仕掛けたのだ。

自分に似ていて、けれど自分に無い、大切な何かを持っている姫。彼女を掠つて来た時に、彼は彼女の為なら死んでも良いと、そんな事を思ったのだ。死とは無縁の彼が、である。

初めての恋は、けれど多難を極めていた。

それでも、死んでも良い等と考える程に、死にたくなかったのなら、いつか倅せを求めたりも、するようになり、なるかも知れない。

少なくとも、この後ろ向きな思考に非常に立腹している前向きな姫君が、今は傍に居るのだから。

## 5話 王子の錯覚

紫蘭姫の絵姿を目にした時、ヒラリスは「何と美しい」と思いはしたが、多大な期待は抱かなかった。

南のカテアの国の姫と東国セリカの紫蘭姫、その二人が、国を越えて有名な美姫として謳われている。

二人の絵姿は同等に美しく、同じくらい目を惹いた。

だが、絵はより美しく描かれるモノだったし、パセクの姫の倣いもある。

あの日迄、セリカ、パセク、カテアの三国の姫達は王子達の憧れの的だった。

同じくらい美しい姫君達の、それぞれ違う種類の魅力に、王子達は誰が彼女達を娶る事になるのか、その心を手中にするのかと、浮き立つような噂話に興じたりもしたのだ。

実際に目にしないと、信じられない。と云う、当たり前な事を学んだ事件である。

カテアの姫は美しかった。絵姿に勝りはしないが、詐欺と云う程でもない。カテアなら良いがパセクだと困る。絵姿の半分も美しくないパセクの姫。

美しくない…忌憚なく云うならば、寧ろ醜女と呼ぶべき女。

容色に、そこ迄こだわる気持ちは、ヒラリスには無かったのだ…  
…あの日迄は。



「我恵那王子の二の舞は、踏みたくないからなあ。」

パセクの姫の婚約者だった、東国の王子を思い出し、ヒラリスは何と、紫蘭姫の美貌が如何程かと、調査の旅に出たのである。

セリカとカテアならセリカの方が国の文化度は名高いが、カテア一国として見るなら、そこも十分に芸術の国だった。それならば姫を見比べたいのが人情と云うものだろう。

カテアの姫には彼の国の夜会で出逢った事があるので、問題はセリカの姫だった。同じ東の国の癖に、ヒラリスの友人である我恵那王子は彼女に逢った事がないと聞くが、自分は是非とも逢いたい。いや、見たいのだ。と、決心を胸に刻んで旅に出た彼である。

「そして垣間見たんだ、あの方を…」

ヒラリスは東の森へ至る道中に、想いを巡らし熱っぽく思い出し  
ていた。

忍び込んだ城の庭園は、見つければ危いが、美しいものだった。  
流石に名高いセリカだと、芸術の国をそれだけで納得させる庭を歩  
きつつ考えていた。

ますます、姫君には美しくあつて欲しい。いや、この際贅沢は云  
わない。人並みな美人で充分だ。カテアの姫ほどの美貌など無くとも  
構わないから、好みの範疇に収まってくれと願ったのだ。

相手の美しさは我が子の美しさに繋がり、我が子の美はそのまま  
政治の道具にもなるのだから、彼の考えは唯、自分の為と云う訳で  
はない。

勿論美しい女性は好きだが、それだけで無い事も確かなのだ。

「まあ、ダメよ。帰ってらっしゃい。エクウ…エクエちゃん…」

白い猫を呼ぶ少女の声は、細く、銀の月のように美しかった。冬の夜の様に透明で、春のように柔らかかった。

ヒラリスはその声に凍りつき、次の瞬間、その姿に更に凍った。

その声にはその姿しか有り得ぬと云うくらいに、綺麗な、見た事もないくらいに綺麗な少女だったからである。

一瞬にして魅せられたと云っても良いだろう。

東国特有の銀の髪は青のグラーションが懸かっていた。青と碧と銀の髪。1番強い色はやはり碧だったろう。眸はこれまた東国以外には捜す事も困難な金銀妖瞳。その中でも珍しい、紅玉と紫玉の組み合わせだった。

彼はその時にセリカの姫を紫蘭と呼ぶ事に決めたのだ。

美しい姫。絵姿の倍、いや絵など彼女の素晴らしさの十分の一も描けてはいない。その絵の半分でも美しい女性であって欲しい、と願った結果がそれなのだから、彼が恋に落ちたのは当然と云えるだろう。

熱狂した、と云っても良い。

ただし、それは後ろめたさを隠す為、と云う要因を多分に含んだ恋の病だった。

東の名は理解は難しいが神秘的で美しい。紫蘭がまさしく紫蘭の花を躑し、夜明けと硝子を意味する名前だと教わった。

勿論、夫となれば、彼女を二つの名で呼ぶ事が許されるのは自分だけなのだ。硝子の花で硝花も良い、蘭の花も同様に美しい。姫の両親が呼ぶその名も綺麗だと思う。この、二つの名を呼ぶ事を許される、等と云う雅やかな風習がまた素晴らしい。

クルトの王子の「持ち物」にセリカの姫君がおさまるのだ…と、あからさまな言葉にするならば、そういう所有欲、支配欲を、満足

させる事実なのだ。

この美しい名前に相応しい見目が有るかなと、意地の悪い事を考えたのも確かだった。

無意識の支配欲は、けれど姫君を目にした事で微妙に形を変えた。元々が素直な性質を持つヒラリスだから、そのまま恋うる心に置き換えて、歪む間もなく情熱の中に落として燃やした。

「そして僕はあの方を守る事を誓った」

走り出て、ひざまずいて剣に誓いたかった。彼女の手に剣を預け、その前に命を曝したかった。

誓いを述べて、許すと、彼女の云って欲しかった。共に誓いの儀式をしたかったが、勿論走り出たりはしなかった。流石にその程度の分別は残っていたので、心に一人誓っただけだ。だが儀式なしでも充分真剣な誓いだったのだ。

だからこそ、今回も旅に出て来たのである。

自分や国の名誉も大事だが、彼女への愛以上に重いものが有るだろうか？とヒラリスは思った。

立派に恋狂いの若者である。

まさか恋する姫君が、魔王に心を移しているなどと彼には想像も出来ず、心を痛める想像の翼が向かうのは、彼女が如何に心細い気持ちだろうか：どんなにか苦しんでいるだろうか、等と美化された繊細な姫君の姿ばかりである。

「姫君は僕を待っているだろう」

確かに待っていた。

「早く救われたいと、願っていらっしやる事だろう…」

救いも、求めてはいただろう。だがヒラリスの恋に眩んだ眸に映し出される姿とは、些か違ったかも知れない。

彼がそれを知らないのは、彼の倅せに一役買っていた。いや、それを知る事は、彼を一転して不倅にさえしただろう。

しかし、彼はそれを知らず。だから、こうして旅を続ける。

正式な旅ではないから、そして、唯のお忍びでも無い故に、街路は使えず慣れぬ悪路を進んだ。

姫君の為に、追いはぎや強盗も斬り伏せ、そこに至る道を塞ぐ、悪人達の巢も潰さなければならなかった。

こうして時に各国の王子達が、冒険の旅に出るお陰で、悪人達の数を広めずにいられるのだ。

冒険の失敗も念頭に置いて、秘密裏に事が進められるのも、もしかして民にとっては都合が良い事だろう。

勝手に秘密に行く為に、平和な街路を避けて、悪路を進む。悪人達の潜伏する人の通わぬ道を切り開いてくれるのだから。

そして今日も彼は戦う。

自分を愛さぬ姫の為に。

誰より愛する、姫の為に。

## 6話 掠われた姫君の日常

「紫黎花、我が姫。今日は貴女の名を飾る花を手に入れて参りましたよ。」

「まあ、この紫蘭は…」

この星のものでは無いだろう。

「女神の生まれた星にある花が、元々の由来と云いますからね。」

この世界のものでさえ無かった。

紫蘭は複雑な気持ちで微笑み、小さくため息をついた。

それでも、この星の花とは違い、小振りな紫の花に和む。端正された大輪も良いが、この花は野趣を含み素朴で可愛いらしい。濃い紫の大量の花束に、どれだけ摘んだのかと笑いも零れる。

自分の為に揃えられた花が嬉しくない訳がない。大多数の女がそうである様に、紫蘭もまた花を贈られる事が好きだった。

「貴女と美しさを競う事は叶わなくとも、貴女を飾る事ならば、この花にも出来るでしょう。」

そう云って、彼女に花を捧げて跪く。

傅<sup>かす</sup>れ、手に口付けを許し乍ら、彼女は泣きたくなる。

彼はこれ以上、彼女に近寄る事をしない。愛していると云い、激しく深い恋を眸に顕して、ただ視つめるだけ。

言葉と、言葉以上の眼差しと、たまに…そつと白い手に口付けるだけ。

勿論。

それ以上の事を望まれても困る。最初に拒んだのは紫蘭だし、ま

た今求められても拒むだろうが、だからと云って、嫌だと思つてい  
る訳でもない。

女心は複雑で、彼女の立場が尚一層それを深める。

「クルトの王子が、三弥山まで来ましたよ。あそこの盗賊に襲われ  
て負傷したようです。」

優しい声がうっとり、彼女を視つめたまま告げる。

穏やかに。

静かに。

全然違う話題なら似合うかも知れない。

もっと平和な、優しい声が似合う話題は、いくらでも有る筈だ。

けれど、優しい風情に混乱を覚えるその話が、燕夜の一番組にす  
る話題で、紫蘭は気分が悪くなった。

燕夜を残酷だと思つて訳でも無く。ただ、己の罪を自覚する。

「大丈夫ですよ。ちゃんと逃げ延びて、手当てもしたようです。」

穏やかに残念だと続け、そんな事を云いつつも紫蘭の顔色を心配  
そうに窺う。

的外れな心配をして、彼女を喜ばせるつもりを情報告げた。

「十日もすれば来るでしょうね。彼は、貴女に熱烈な恋をしている  
ようだ。」

女を切なくさせるような微笑は、紫蘭のお気に入り表情のひと  
つだったが、彼女は微かに頬の辺りを緊張させて、首を振った。

「一人にして。」

「……御心のままに。」

彼の不在の空間で、彼女はまた首を振った。

ゆっくりと、左右に振って、泣きそうな表情をした。

呼ばない限り、彼はこの部屋を観ない。声を掛けてから現れるの

もその為だ。

偏執じみた執着を見せ乍ら、珍しいくらいに礼儀正しい紳士で、どうしたら彼を嫌えるのか教えて欲しいと紫蘭は思う。

感情を隠せないなんて、彼女にはついぞ覚えが無かった。

今迄、自ら計算して零す以外に、心を曝した事など無い。

なのに、誰も見てはいないからとは云え、今…涙を堪え、せき止める事の出来ない感情に振り回されている。

紫蘭は叫び出したいような気持ちを持って余した。

もし、燕夜が彼女の様子を目にしたら、また、哀しく嗤うのだろうか。

ヒラリスの為だと誤解して、自らを嘲笑うのかも知れない。

事實は燕夜の想像を超える。

ヒラリスが来ると知った時、無論、来るのは知っていたし、早い到着を祈ってもいた。燕夜からも折りにふれ、ヒラリスの道程を報告されていた。

だから、別段、驚くには値しないのだ。

本来なら。

なのに先刻、そんなにも近く迄来ているのか…と衝撃を受け、更に、そんな事でショックを受ける自分自身に愕然としたのだ。

早く…来て欲しいと願っていた。

早く、来てくれないと…自分の心が解らなくなるから、いや、そんなものは本当は解っていたが、せめて、理性が保てる内に来て欲しい…と、彼女は願ったのだ。

救って欲しいと願った。

国も、何もかも。

総てを、どうでも良い……と、すっかり考えてしまうような、そんな自分の感情から、助け上げて欲しい。そう彼女は願った。

想いを殺して、何も無かった振りで、嫁げると思った。

時に胸が痛んでも、狡かった自分を懐かしむ未来が待つと信じた。

恋など錯覚に過ぎず、ならば夫となる人に、上手に恋をして、愛されるように立ち回れば、それが一番倅せな筈では無いか？

燕夜なんか。何故愛したりしなければならぬのだろうか？

ヒラリスの行程に、来るな、と念じた。

早く来て、助けてと願った。

誰も来るなと祈った。

祈る自分を紫蘭は自覚して、けれど己の立場もまた……よく弁えていた。

政治のゲームはもはやどうでも良い 何より彼女を楽しませたのに が、国の平和と安全をどうでも良いとは云えない。

そして、彼女の貞節が破られる事は、セリカとクルトが争う事でもあった。

例えば、南の国の姫ならば、体をひらかれる事が、貞節の終わりだ。男達の考えもそうで、紫蘭には理解出来ない。

ならば心で誰かを愛しても、体さえ触れなければ貞節は守られるのか？

理屈に合わない、と、紫蘭は思う。だから、東と似た考え方を持つ、西に嫁ぐ事にしたのである。

実際、掠われた時には、嫁ぎ先が西で良かったと思った。



けれど今。紫蘭は肌を守り乍ら、心を奪われた。決して、誰にも覚らせはしないが、確かに紫蘭の貞節は失われたのだ。

南が嫁ぎ先ならと、一瞬とは云え、紫蘭は考えた。

あの国が、例え、一回でも掠られた姫に、敬意をはらわないと知り乍ら、それでも、そんな莫迦な考えを浮かべずにいられなかった。それ程、彼女は衝撃を受けたのだ。

何よりも、燕夜がヒラリスに自分を渡すかも知れないと、そんな可能性を恐怖した。

そして、それを恐怖する自分自身こそ、彼女は何より怯えたのだ。

紫蘭はけれど、いつまでも怯えるだけでは無い。

毅然と顔を上げた。

あごを引いて、眸を細めた。

決意には一瞬で足りた。

「燕夜。」

どんな囁きにも燕夜は応じる。

黒衣の男は相変わらず美しかった。

誰よりも美しいと彼女は思った。

美は力。美は正しき事象。身についた教えが後押しをする。

「貴方は、わたくしをヒラリス様に渡すの？」

冷ややかに彼女は尋いた。

甘い声が応えたのは、彼女が望んだソレに相違なかった。

「彼は殺します。」

「クルトが攻めてくるわ。」

冷たい声がつまらなそうに云うと、彼は深い静かな笑みを見せた。相変わらぬの淋しい笑みで、何処までも沈みそうな深い色の眸。それでも、紫蘭を知らぬ頃の、愛する事を知らぬ彼の、空虚な絶望と寂寥感は失くなっているのだ。

彼女は以前の彼を知らないが、その事は知っていた。

「全軍は来ませんよ。例え来ても追い返しますが。」

「全軍相手どれると?」

不信の眸に苦笑が返る。

「私はこれでも魔王ですよ?」

その言葉に、彼女はいたく安堵したのだった。

「私は、けれど…貴方のモノにはならないわ。」

「ええ、それでも。私は貴女と共に居たいのです。」

「愛さないわ。」

「ええ。知っていますよ。」

その笑みは、この上なく優しいものだったが、彼女を泣きたくさせた。

先程以上に、彼女を哀しませ、苦しめた。

そして、それ以上に怒らせた。

嘘付き。知らないわ。貴方は何も知らない。

私が誰を愛するかさえ、あなたは知らない。

そう思っただけ彼女は顔を背けた。

冷淡な振りは必要無かった。

充分に、男に対して反発を覚えていたからだ。

「何処かに行って。しばらく帰ってこないで。」

「はい。姫君。」

何にも知らない。

私の望みも、本当の言葉も、何ひとつ。どうして知らない。彼女は床に、机上の物をたたき付けた。

涙は出ない。

泣きたかったが、泣けはしない。

余りの情けなさに、呆れ果てていたのだ。

あの莫迦が…と紫蘭は思う。

初めて逢った時には、全部解った癖に、と。

内心、叫んで、今度は椅子に手をかける。

叩き壊した。

護身用に好きでもない　と周囲が考えていただけの　剣や体術を習っていたが、熱意はとも役立つていた。彼女は刺繍などより余程、剣の方が好きだったし得意だった。

ヒラリス王子は、彼女のこの姿を見ても、恋の海に溺れたままだろうか？

少なくとも、燕夜ならば、ひとかけらも想いが冷める事はないだろう。

燃える事はあつたとしても……である。

何と云つても、彼そっくりの手腕に加えて、彼に無かった「大切な何か」を彼女は持っているのだから。

## 7話 王族の色彩

東の森に至る道程は、ヒラリスにとって、とても長く厳しいものだった。

三弥山で、またもやその辺り一帯の悪人達と戦い、剣を交え、彼は肩を斬られた。

自ら簡単な手当をし、逃れついた洞窟のなか、ヒラリスは体を休めた。

その顔色は酷く悪かったが、彼は諦めない。  
瞼を上げたなら、その蒼の眸が情熱を失ってないと知らせるだろう。

美しい王子は、白い肌に焦燥を載せて、それでも絶望する事はなかった。

それは紫蘭への想いもあるだろうが、ヒラリス生来の前向きな明るさがモノを云う。

誇りや名誉も、王子にとって重要な問題だったが、彼女に想いを馳せれば、それらは脳裏から消えた。

自らに暗示をかける様にして、ヒラリスは紫蘭への想いを深める。

無意識に、セリカの魔法に畏怖を抱き、

心に掠めた不遜な感慨を、熱烈な恋で上書きしようとした。

ヒラリスは基本が大らかで明るい性質の男だったから、

そんなきつかけでも捻れる事はなく、  
本物以上の愛が育つ筈だった。  
何せ、ヒラリス自身は殆ど無自覚だ。

庭園で、美しい姫を見た。

く力を含む美しさに警戒したく  
その美しさに陶然とした。

警戒心はヒラリスの内心奥深くに沈み、意識したのは綺麗な幻の  
記憶だけだ。

そもそも、東国の王家は心を操る魔法に強い。

セリカは特に神に愛され 能力に恵まれ 姫の美貌ならば、  
確実に。

全くチカラを持たない等とは考え難かった。

神司、太宰、王家。

熱い息を吐いたのは、だが、姫への気持ちからではなく傷が熱を  
持ち始めた故だ。

神司はカンシ、何故かイシとも云われる。

神の歴史を学ぶ時に、真っ先に出て来るのは、やはりセリカだ。

神に1番近い、神司を当たり前の様に産む国。

神の司だ、その『宝』への通詞を行う。

故に人へのそれと画して通司が、この場合は正しい。

小さき門、狭き門を司る存在。

教育係の声を思い出す。神官と、王宮の宰と、何人もの声が、語

る。

イシとは神殿の鍵の管理者と云う意味も有ります。

イは狭き門を表現します。

出納を司った為に混同されたのでしょうか。

神司、カムシでも宜しいですが、と教師は云う。

神司のツウジする『宝』は、神の存在です。

お言葉。お声。

その煌びやかな、存在の証を、神の従僕たる人間に届けて下さる、それが神司です。

だがソレは巫覡の存在とも違う。

何故なら、

巫女や神官は、

神の声を聞く事があっても

人間でしかナイからだ。

人間として生まれ、神に列なる。

ソレが、

神司で有り。

太宰で有り。

王家は、それに膝を付くものでしかない。

神司と太宰の違いは、

統治するか否か…だ。

教師の声が云う。

立場として、どちらが上と云う事は無い。

強いて云うなら、神の寵愛次第とも云うし、その『神次第』とも云う。

些か不遜だが、

と教師は声を低める。

神にも、上下関係が有る。

リア・リルーラを頂点と讃えるのは良い。

ソレは神々が謡う詞だ。<sup>コトバ</sup>

シ・エンを頂点と讃えるのも良い。

リアを例外とすれば、主月神は神々を統べる存在だ。

主月神の下に月神達。勿論、17番目の月女神たるリア・リルーラを除いて、ソレは全くの『事実』である。

単にリアと称えればリア・リルーラの事だが、

単にリーと称しても、リー・シェンを示しはしない。

シ・エン。またはリー・シェンと唱えるのが慣例となっている。

リア・ダ・リアルテ。  
女神の中の女神。

男神を呼称するならリーだが、リア以上に名を喚ばぬ様に気遣わねばならぬ神も存在しない所為もある。

他の神々は月神達に仕える。

ギリギリで、大丈夫だ。

だが、リア・リルーラとシ・エン以外の月神の上下やその関係は口にすべきではない。

ましてや、

他の神々の問題となると、  
人の世界もかくやと乱れ、  
決して、正しい解答など有りはしないのだ。

では先生。

と、ヒラリスは尋ねたものだ。

主月神やリアの寵を得る神司や太宰が居たら、  
その人は神さえ憚る存在と云えますか？

教師達は息を呑んだ。

不遜窮まりない、それは言葉で、  
言ノ葉に載せた、その事実<sup>ニ</sup>寧ろ憚り、  
教師達は、教育係の権限をもって、ヒラリスに楔ぎを命じた。



熱の所為か唸され乍ら、ヒラリスはいつしか夢を見ていた。

過去の夢を。

教師の一人は、しかし後に云った。

あれは、不遜では有りますが、事実でも有るでしょう。

二度と口になさらぬよう。

と、飽くまでも慇懃に、命じられもした。

西国は、神の加護が少ないのかとヒラリスは思っていた。  
だからこそ、

その光栄以上に恐怖をも知らず。

不遜な念いが生まれたかとも感じた。

王家に生まれて、口に出来ない想念だったが、教師達は、周囲は、  
全く逆の事を王子に見ていた。

こんなにも、

神の寵愛を得る王子が

西国に生まれた事が有るだろうか？

その王子は、期待通り、東の姫を娶る。しかも、東の中でも名門  
中の名門、王家の中の王家。

惑星フライサ、最古の王朝の直系の媛宮である。

クルトの民の熱狂は如何ばかりか。

その姫が掠われたら、そりゃあ助けない訳にはいかない。

神に愛された美しい媛宮、多分チカラ持つ姫君に、ヒラリスは嫌われる訳にはいかない。

そして、惹かれるに十分な美しい姫君だ。

ヒラリスは無意識に、姫君に対する熱狂的な恋慕を己に課した。枷として心を縛り、その打算は奥底に沈め鍵をかける。

媛宮が心を読むならば、もっと、深く、甘く、優しい、恋を、愛を、育て上げないと

倅い。

ヒラリスは恋を知らなかった。

今までに一番衝撃を受けたのが、外ならぬ紫蘭姫相手だったから、擬態はきつと、本物の恋になる。

筈。

だった。

世の中は、

そんなに上手く行かないと、

神の寵愛をうけたヒラリスは知らなかった。

だが、

此処に、

神の寵愛は錯綜する。

ヒラリスの夢の中で、  
教師の声が云う。

気まぐれに東の魔王と称しても、あちらの太宰であるには違い有りません。

あのお方こそが、主月神に任じられた東国全ての王であり、リアのご寵愛は、なんとヒトの王子で在った頃から変わらぬものと云います。

決して、関わってはいけませんよ。

東是王 トウゼオウ 。

東の王は是なりと、神が宣告した存在。  
東を統べる王。

東国全てが、従う王。

東の森、中叡あたるとの奥に住まいする、  
隠遁を気取る王。

いつしか  
黒の王子。

東の森と魔王と喚ばれ、自らも称して憚らない。

千年王。

とも、  
呼ぶ。

永き時を、

神の代わりに、  
東を統治する。

トウゼ王。

梨燕紫夜蘭。  
リエンシヤラン

美しい夜の魔王。

普通は、  
そんなモノに、  
勝てる訳がナイ。

「関わっちゃったよ……先生。」

熱の所為で、常の強気が鳴りを潜めた。

姫？

覗き込む眸の色はセリカの王族の金銀妖瞳。  
銀と青の髪が月の光を呼び込む。

冷たい手が額の熱を掠う。  
熱に浮かされ乍ら、見上げた貌は、

庭園で垣間見た姫よりも硬く冷ややだ。

月よりもなお冷たい美貌。

なんて  
綺麗なんだろう。

ヒラリスは手を伸ばす。

届かない月かと思ったら、冷たい髪に指先が触れた。  
肌に触れれば温かみがつる。

綺麗な貌が微かに驚きを示し、眉を寄せた。

我慢出来ずに引き寄せる。

触れた唇は、

すぐに逃げると思ったが。

不意に

強く求められた。

唇を吸いあげ、

舌を絡め、

唾液を交換し、

ヒラリスは、自分が一体何の夢を見ているかも解らなくなる。

息が苦しくて逃れた。 追いかけて来て、舌を吸われ相手の口中  
に引き込まれ、歯をたてられた。

欲望を刺激され、ヒラリスも積極的に応える。角度を変え深く口  
付ける。上唇を軽くはむ様にして、舐めて、吸って。

口腔内の快樂が、下半身にも熱を与える。

「はっ……っ？」

ヒラリスを押さえ付けるようにしていた影が

唐突に離れた。

直前迄、強く求められていたのに。

熱を分け合い、

喉を吸われ、

白い手に肌をまさぐられ……。

姫……は、そんな事は、しない。

ぼんやりと、思っで。

けれど、やっぱり離れた熱が恋しいような、

そんな気がして、

混乱したまま、意識を手放した。

別の熱が、取って代わり気付かなかった。

ヒラリスの、

傷からもたらされた熱は下がっていた。

深く裂かれた、怪我そのものも、

月の光の下で、

痕を消していた。

前日は、痛みに呻いた。

今現在、傷は何処にも無い。

前日は、熱に喘いだ。

今、スッキリと爽やかだ。

あれは、三日で治る感じでは無かったなあ、  
とヒラリスは独語する。

これは最早死ぬのかと、半ば覚悟した頃に……  
救いは来た。

神の、寵愛を湛えた姿で。

西にはチカラを持つ者が少ない。  
だから、多少、戸惑いはするが。

このチカラが、神の加護なのは解る。

美しい、青年が、傍に居て。

そりゃあチカラの一つや二つもつだろう美貌で、

明らかに、

セリカの血筋だった。

眠る前に気付いていた筈だが、

眠りに落ちる前より、

意識してしまうのは何故だろう。

傷の所為で高熱を出した。

そこに、

顕れたのが彼である。

その美貌は単なる民とも思えず、  
それ以前に、

『白』の住人と知り。

女神の、お膝元。

疑うのも、不遜。

熱に浮かされても、

ヒラリスは冷静に受け入れた。

その美しい同行者を。

身分的に、受け入れざるを得なかった。

とも云う。

熱の所為か、記憶は、所々曖昧だ。

それでも、とヒラリスは思う。

大事な事は、覚えている筈だ。

その時も、

ヒラリスはちゃんと、

自分が何と云ったかを覚えている。

「ではどうか、私に対して先程のような言葉を用いられません様。  
立場がなくなってしまうです。」



なくなるのは勿論ヒラリスの……だ。

白の塔で白の位イロを持つ相手に対して、  
それは不遜と斬り棄てられても仕方ない態度だった。

当然、美貌の青年が、慥な挙措に騙される筈もないと気付いて、  
なお発言するのがヒラリスなのである。

## 7話 王族の色彩（後書き）

やっと、神司カンシと太宰タイサイの説明出せました。

燕夜の立場と。

同行者も。

同行者は名前が出せてナイ事に気付き、見直しましたが、揆込めるか悩み中です。

全部、頭の中では終わって、新しい物語が始まっていますのに……  
もどかしいですね。

神司は造語、太宰は…地球とは大分違いますねww

仕える相手が帝ではなく神なので、まんま王と云う呼称に。

イシは割と、まんまな説明ですが、そうやって明らかかな語源や燕夜が採取した花などに、地球匂わせてますが。

この話には地球は全く出て来ません。

思わせぶりでゴメンなさいm(´・`・)m

これから、燕夜の過去…リナキアごめんね事件とか、

砂久弥とヒラリスの旅路とか、

女神がアチコチ出没したりとか、

やっと、具体的に話の骨格が。

読んで下さる方に、過去と現在が混乱して判別付け難い……等と云われぬ様に、落ち着いて書きたく思います。

来月から2ヶ月間は土日祝日がお休みなので、更新は休日か、明けた夜がメインになるかと存じます。

今回は11月にお会いしたいです。

お付き合いの程、宜しくお願い致します。

## 8話 出会い

目覚めたヒラリスは、肩傷の痛みで顔をしかめた。

いや……有り得ないだろう？

その考えに、ヒラリスの貌が引き攣る。

確かめる様に、そっと軀を起こして、静かに腕を回してみる。

痛みの割には、そう酷い怪我でもナイ様で……つまりは更に異常だと云う事だ。

前夜の状態を思えば、有り得ないくらい回復していた。

多分、姫の夢を見たのだろうか？

切ないくらい姫君が慕わしい。そんな気分になった。

いつになく、鮮やかな程の……碧と金赤の眸が焼き付いた記憶の如く蘇ったが、ヒラリスは首を傾げた。

脳裏に浮かぶ美しい幻は、昨日迄よりも鮮やかで、奇妙な程に熱い思慕に駆られた。

いや、勿論……自分は姫に恋い焦がれているとも。と、ヒラリスは頭を振った。

だが、自らに云い聞かせるように恋心を育てたソレと、今の状態

が重なる訳もナイ。

魔法……か。

独り言ちる。

顕著な体調の快復を思えば……やはり魔法の力を否定出来ない。

ソノ術を施した人間が、何らかの魔法をヒラリスに残したのかも知れない。

と、すれば……姫を自分に救わせようとする立場な筈だから……

味方……なのか？

勿論。

断定は出来ない。

クルトに仇なす者も、ヒラリスが恋狂いなのは悪い話ではナイ筈だからだ。

だが、敵に近いとしても……すぐには死なせたくナイのは確かだ。

傷はかなり深かった。死ぬかも知れない、とさえ思った。

少なくとも、アレを今の状態まで回復させるのは、自国クルトでは神に縋る事でしか叶わナイ。

西国の、そしてクルトの、魔法の遅れと受け止めるか。

東国の、魔法の特化と見るべきか。

ここ迄の力だと、先ず平民とも思えないが……と、ヒラリスは考える。

東国で？

トウゼ王に翻意する者が居るだろうか？

無理が有る。

奇跡に近い回復とは云え、未だ完全ではない自分の体調を確認する。

余程親しい者でないと知らない事実だが、左手で剣を遣う彼は、痛む肩が右である事を感謝した。

幼少の折から、右も同じ様に使える様に鍛えてはいるが、真剣勝負なら…左が断然有利なのだ。

とは云え、かなりの回復を認めても完全な復調ではナイ。

「取り敢えず、今日は休むか。下手に進んで悪化させたくない。」

冷静に、ヒラリスは断じた。

勇ましさと無謀は違う。痛みに対する我慢も、この場合は無駄だ。

寧ろ、正しく我慢強くあるなら、休養の大切さを知り、焦りを耐える事だろう。

先に進みたいのは山々だが、大切なのは姫君を救い出す事であり、怪我をおして勇ましく進む事ではない。

魔王と戦う時には、万全の態勢を整えたい。

その為に、東の森の手前でも、休息を考えていた。

魔王に勝てるかどうかなど判らないが、姫君を逃す事さえ出来れ

ば、少々痛め付けられるくらい大した問題ではない。

勿論、「戦うのなら」負ける気は無いが、敵が強大な事をヒラリスは知っている。

ましてや、その敵に出逢う以前に、その辺の盗賊等に殺されるのはゴメンだった。

「莫迦じゃないからな。」

自らに云い聞かせる様に、ヒラリスは呟いた。本当は今にも飛び出したい様な気持ちを宥める為だった。

今日のヒラリスは、やたらと姫君に思慕が募って、気持ちが焦るばかりだった。

左は赫と金。右は蒼と碧。煌めく黎明の月。その美貌………そこ迄想起して、ヒラリスは首を傾げた。

「何かが違う……様な？」

道に迷ったような、奇妙な感覚が心を掠める。

まさか本当に魔法なのか？

いや、やはり焦っている所為だろうか？…そうヒラリスは自得して頭を振る。

洞窟は存外居心地が良い。洞窟にしては………の注釈付きでは有るが。休むと決めても灯火を無駄に使う気にもならず、愛馬の様子も気になった。

食事の必要性も強く感じ乍ら、獲物を狩る体力は大丈夫だろうか  
と自問する。

表に出ようとしたヒラリスだが、出口に至る前に足を止めた。

まるでサンルームの様に、吹き抜けになった小さな空間が中庭の様相を呈していた。

小さな…とは大国の皇太子の主観だから、通常の民ならば「宮殿の奥庭の様な別世界だ！」と想像を逞しくするかも知れない。

果実を実らせた木々に、柔らかい芝生。温泉迄有る。

「お前も……無事………と云うか。元気そうだね？」

緑の向こうに愛馬の姿にヒラリスは安堵して、その場所の観察を続けた。

茂み…いや、生け垣の向こうから、愛馬が嬉し気に寄って来て…  
…ヒラリスは昨夜は放置した筈の馬が、清潔で艶やかな毛並みをしている事に小さな驚きを覚えた。

…やはり誰か居るのか？

優しく馬の首を叩き乍ら、そう考えたのだが。

それ以前に「此の場所」が「不思議」を抱えていたので、ヒラリスは治癒を施した存在と、愛馬の様子を結び付けるのを保留する事になった。

顕著な人工の痕跡を見出だし、長く手入れはされていない様だが、この洞窟が単なる自然とは異なると強く感じた。



「盗賊でも住まいしていたかと思っただけ……。」

迷い込んだ時は熱の所為と、夜の闇に気付かなかったが、聖なる結界が編まれた石が、自然を装う小路を作っていた。

「いや…無理が有るから。」

王宮の中庭同様に、こんな場所に自然の道など有り得ない。不自然極まりない「自然」に、ヒラリスは苦笑した。

誰か、身分有る人の……隠れ家でもあったのかも知れないな。とヒラリスは考えた。

少し動いただけで、熱が上がリ目眩がした。

明かり取りの役目を果たす洞窟の吹き抜けを見上げると、採光は晴れ間そのもので……太陽の温もりを肌が感知するにも拘らず、どうやら外は雨の様だった。

雨は洞窟に落ちる前に掻き消える。

本当に消える訳ではなく、「自然」を模した小さな水香場に苔を飾る石の狭間から「自然」に流れ出る水流に紛れているらしい。

「……………中々芸が細かい。」

この「庭」を編んだのは、かなりの庭師と術師の様だった。

このまま神殿に続いても奇異ではナイくらいの、高度な術を見つけてヒラリスは熱の所為で定まらない思考を重ねようとして……断

念した。

東の森の近隣で、神々を迎えても大丈夫な場所？トウゼ王が関知しない場所だ等と云えるだろうか？

だが、長期に渡り、放置された場所には違いなし、悪意有る者は入り込めない聖なる結界も有るし……。

何より、所詮は坊ちゃん育ちのヒラリスは、ここ数日の旅路で……安全に休息出来る場所に飢えていた。

何か食べないと……そう思った傍から野兎が姿を現したのを発見するに至り……、深く考えるのは止めたヒラリスである。

魔法も。

自分に懸けられた、何等かの魔法も、治癒だけかも知れないし、そうでナイかも知れないが……此の場所で享けたからには、そう悪いモノではナイだろう。

そう云う訳で、ヒラリスは暫時の休息を自分に許す事にしたのだ。

それでも、その日から続いた視線が、気にならない訳ではナイ。  
いや。

認めるのは釈だが……、多分もつと以前から。

と、なれば自分を治癒した魔法を連想もする。  
たまたま多少はマシになったから隙が減じて近寄れないだけで、  
もしかしたら……あれからも治癒を施してくれる気が有ったのかも  
知れない。

3日を経て、体調は思わしく無かった。  
傷は再度痛みを増し、熱も上がって下がる気配もナイ。些細とは  
云い難い悪化は、最近の疲労が一気に出たとも云えるだろう。

非常に釈だが……と、ヒラリスは考える。

痛みを耐え、熱がまた高くなったのを自覚し乍ら、このまま再度  
倒れるよりも……とヒラリスは考える。

助力を頼む方が、より恥は少ないと見るべきだろう。

せめて。

未だ虚勢を張る気力が有る内に……と。

そう考えて。

その日は朝から機会を窺っていた。

昨日と。一昨日と。

ヒラリスは変わらず洞窟の中での日常を過ごした。けれど、その  
気配を完全に忘れる事はナイ。

相変わらず、馬は放置しても誰かが世話をしているかの様に清潔  
を保っていた。

この場所なら、飼葉の心配も要らず、ヒラリスは愛馬に対する義  
務も、此処では殆ど気にせず居られた。

それでも愛馬を見れば心が和む。草を喰む姿を視線の先に映しつつ、ヒラリスは自らの食事の為に火を焚いた。

肉の焼けるのを待ち乍ら、ヒラリスは地図を広げる。

本来の旅程ならば、この道でも、後5日も有れば行き着く距離だったが、まだまだ敵は多い。

「三弥山にも後2つ。赤鬼党と馬黄炎を名乗る山賊には、どうしても遭遇せざるを得ないか。弥塚の方角なら大きな所帯は無いが、小物が50?……うわぁ面倒くさつ。」

冒険用の地図は危険の印を指し示す。

ヒラリスの地図は高価なだけあってリアルタイムに更新された。

「……………?」

どうやら此の辺りにはヒラリス以外にも冒険をする「者」なり賞金稼ぎでも存在するのか、先日地図を開いた時に比べ……明らかに「悪人」が減っていた。

「賞金稼ぎ?まさかな。」

それは滅多に遭遇しない「冒険をする王族」より、尚…珍しい存在だった。

賞金稼ぎは神々の従僕だと云われる。

「神の代行者」を賞金稼ぎと呼ばわるのは不敬と云う者も居るが、……彼等は自らそう名乗る事も有るらしいから、微妙な問題だった。

まさか例の治癒者だったりしないかな?

ヒラリスは考えたが、それこそマサカだよな……と自ら否定した。賞金稼ぎに魔法力を持つ者が居ない訳では無いだろうが、彼等は「賞金首」を倒すのに、相手の能力に準じる獲物を使用する……と云う掟が有る。

武器の種類迄は問われないが、武器を使う者に魔法の使用を赦されない。

武器を使う者が魔法を使えない場合は多いが、対して、魔法を使う者が武器が使えない者は先ず居ない。絶対とは云わないが、得手不得手は別にして、道具を学べば利用出来る能力を有しない者は、滅多に居ない筈だった。

そして、賞金稼ぎは、その惑星に許可された範囲の、武器の使用しか認められて居ない。

性能はかなり良いらしいが、剣を百本持ち歩くより、半永久的に使用出来る方が良からう……との理由が主流の性能だと云うから、推して知るべしだろう。

この惑星は科学を棄てている。

実弾を使う銃の存在さえ、王宮の奥に眠る「歴史的な道具」な訳だから……使える武器の主流は、剣や弓だ。

この星で賞金稼ぎをする能力を持つ者なら、それらの武器に精通し、並々ならぬ技量を持たなければならぬ訳だが……そんな存在が、魔力も域値を超える？

「有り得ないね……。」

ヒラリスは呟いた。

万が一そうなら、伝説級の存在だった。  
それこそ、国を挙げて歓迎するくらいの。

そんな噂は聞いて無い。現在、そこ迄の存在がフライサに滞在する根拠は全く無い。

絶対不在だと云う根拠も無いが。

「この手の強い人が、味方になってくれたら助かるんだけどな。」

倒された「悪人」を検索して、倒した「相手」を表示しようとしたが「？」と成った。

たまたま旅人にヤラレたか、「目的完遂」までの非表示の手続きが為された相手か……と、何件か検索をしたが総て「？」だった。

冒険者には数が多い。目的を持つ賞金稼ぎ？

「って云うか……今すげえ噂が流れてそうだな。」

ヒラリスは自分が倒した相手を避けて検索したが、一般の人間はそうはイカナイ。

その総てをヒトツの存在が為したと云うなら、それはとんでもない存在だ。

ヒラリスが調べた限りでも、十分とんでもなかった。

「しまったな。西なら何とか捜し当てて味方を頼むんだが……」

東国では、噂に過ぎない相手を捜し出せる程のツテを持たないヒラリスだった。

無い物ねだりをしてても仕方が無い。

ヒラリスは切り替えて、目下の標的に意識を戻した。

魔王に魔法が効果があるととは思えないが、それでも大した存在では有るだろう。

その気配も、ヒラリスがかなり気を付けないと判らない。

治癒の後で判別出来る様になったのだから、それさえも、わざとかも知れない。

多少、自尊心を刺激されはしたが、ヒラリスは明るく声を掛けた。調度、今日の兎が焼き上がったところだった。

「3日も観察すれば充分だろう？出ておいでよ。」

熱をおして、笑顔を浮かべた。

その笑顔は完全な作り物でも無かった。

ヒラリスは自分では王族として最適化していると自覚するが、実際にはそうでもナイ。

王族なら、自分を失う事を注意深く避けるべきだが、ヒラリスは他者に対する事以上に、自己に対する執着に欠けた。

大概の状況に楽しみを見出だし、明るく…軽く、姫に対する心配さえなければ、魔王退治さえ楽しめるだろう。

それで自分が死に至ると可能性さえも、ニッコリ笑って賭の対象にしてしまうのだ。

自尊心は高い。誇りも忘れない。国に対する義務も忘れてたりしない……が、いざとなったら「仕方ないよね？」と棄ててしまえる。

同じく猫被りの東の姫とは、大きく違うのがソコだった。

王子として、口にすべきでは無いから云わないだけで、初めて執着に近い感情を覚えた紫蘭姫を助ける為なら……命を棄てる事になっても、「仕方ない」と思ったし、「悪くない」とも思っていた。

全力を尽くしてダメなら「仕方ない」では無いか？

普通。そんなに簡単に、自然体で、納得したりしない。

ヒラリスも所詮は、神に愛されたモノ独特の……「虚」<sup>ウツロ</sup>を抱えていた。

ヒラリスの、ともすれば軽薄な誘いに乗った人物は、焚火の向こうにフワリと着地した。

どうやら木の上から観察されていたと知り、流石に少し驚いたが、そんな事より一層……心に響く画を、ヒラリスは観た。

悪びれずに、歩み寄る姿に目眩を覚えた。

蒼い銀の髪は晴れた空の青も含む。金赤？金が混ざるルビーの輝く赤。赫。紅玉と神庭の桃の木の実を混ぜた様な、冷んやりと……だが強い魅了の魔力を持った左の眸は夜の月の紫に色を変える。顕らかな程に、セリカ王族の色彩。

右の眸だけなら西国の血筋を疑える色で、蒼と青が煌めく、髪と同様に昼の空。



白い肌、銀の光を零す睫毛、冷たい美貌……冷やかな月の神々に似た美貌……………。

姫？

勿論違う。が。

ヒラリスは姫に向かう筈の思慕を一瞬の内に乱されて、苛立ちすら覚えた。

気の迷いにも程が有る、と内心を押し隠す。

気まぐれな猫の様に、気品溢れる生き物が、ヒラリスの横に腰を下ろした。

どんなに粗野に振る舞おうとも、育ちの良さが滲み出る。

そして、その容姿。

「私は砂久弥と云う。旅の同行を願いたい。」

低い声は、季節に例えるならば冬だ。

男の声で、冬の冷然たる厳しさを湛えた声で、自分が蠢惑される訳が無い……筈なのだが。

ヒラリスは砂久弥の魅了の能力が、生来のモノと推察して困惑した。

本人が使う気もナイ「能力」は「魔法」とは見做されず、依って……抗議も出来ないからだ。

紫蘭姫の姿も、その魔力に満ちていたが、もしかして砂久弥のソレは姫より強い。

同行者としては相当嫌なタイプだと云えよう。

命令する事に慣れた者特有の高慢さは有るが、静かな声音で、礼儀正しい問い掛けだった。

ヒラリスに対し、十分な敬意を含んだ態度で有るのも確かだが、淡々とした口調や眼差しは、彼の本心を教える手助けはしない。

表情に欠けた男だとヒラリスは思ったが、不思議と嫌な感じはしない。魅了のチカラも有るだろうが、奇妙な慕わしさを抱かせる…不思議な魅力を感じた。

「うん。で、君はセリカの人かな？」

あっさりと頷いて尋ねたヒラリスを、彼は相変わらずの無表情のまま視つめ、そつと嘆息した。

「そんなに簡単に認めても宜しいのか？私が敵とは思われぬのか、貴方は？」

どうやら呆れている様子だが、それも判然と仕難い口調で有り、表情だった。

砂久弥の真意を読み取る事が可能な人間など居ないだろう。そう思えば、「特別」過ぎる存在に最早楽しくなつてきて、ヒラリスは笑いが零れた。体調は厳しいが、自然明るい笑顔が浮かぶ。

「勿体振って何の意味が有るのさ。それで？僕の質問に答えは貰え

ないのかな？」

柔らかく明るい声に、銀色の冷たい声が応じる。  
とんでもない声だ……とヒラリスにして思わせた美声で、彼は静かに言葉を紡ぐ。

「セリカ公家出身。白の塔に所属している。」

「姫君を助けに……ですか？」

頷いて、月の光を纏う美貌が最初の言葉を繰り返した。

「供を許して戴けるか？」

「勿論、宜しいですよ。けれど、白の塔からとは、お早いお付きですわね？」

感心して見せたが、当然の事だとヒラリスも知ってはいる。

同様に術を修めた魔王の結界内には降りられずとも、白の塔から一瞬で「此処」に移動して来る事が出来るのだ。

ヒラリスの事情を知っているのも当たり前前と云えた。

「失礼ですが、階級は？」

セリカ公家ならば、辛うじてヒラリスと同等に会話が出来る程度だ。

その人物が「塔」に上がる事で、真実同等になる。

だが、それ以前に王室の人間は「塔」に上がる前に公家に降るのが倅いだから、実際は皇家の可能性が有る上に。

砂久弥の泰然たる態度や、物腰を見る限り……更なる地位も予測された。

「白衣と、青の色を許されている。」

案の定だった。

本来ならば、ヒラリスこそが礼を尽くさねばならない立場だった。

数える塔の中でも最たる位置付けの「白」<sup>ハク</sup>で、しかも白の位。<sup>クライ</sup>ヒラリスも流石に退いた。

そんな奴はもつとエラソーにして欲しかった。

ヒラリスはそう思ったが、途端に遜<sup>ヘリクダ</sup>るばかりの態度が取れる程、可愛気を持ち合わせてもいない。

だが大人だから、とヒラリスは自分に云い聞かせ、慇懃な言葉遣いを採択した。

「参りましたね。ではどうか、私に対して先程のような言葉を用いられません様。立場がなくなってしまうです。」

これも相当不遜な台詞だったが、砂久弥は微笑った。

ほんの微かな笑みでは有ったが、まるで月光が振り撒かれたかの様な、玲瓏たる美しさだった。

昼の月の燦然とした輝きではなく、夜の月の…蒼く冷たい美を砂久弥は湛えている。

対する昼間の月にも例えられるのがヒラリスで、二人が並び立つ様は一幅の絵画の様だった。とは云え、二人以外に人影の見えない此処では、その美を觀賞する存在は、人ならざるモノでしかない。



## 9話 安息と揺らぎ

「言葉には甘えよう。だが、君も敬語は無用だ。此処は宮廷ではないしな。君自身、そんな事で臆する人間でもないだろう?」

しっかりと見抜かれている。

砂久弥の台詞にヒラリスは笑って首肯した。彼の笑顔は、昼間の月の明るさに輝く。夜の月の化身の如き砂久弥と向かい合い乍ら、臆する事がないのも当然の事かも知れない。

そして、砂久弥はどこ迄も夜の月に似ていた。太陽の光を必要としない月の養い児は、ヒラリスの輝きの前で、尚も冷然と美しかった。

白の塔で高い地位を得た彼に、もはや生家に対する義務も義理もない。なのに、姫君を救いに下りて来た事實は、それだけで何かを勘繰る者が居ると知らない訳もないだろうに、砂久弥はそんな心配など全くしていない様だった。

正しく天の住人だたとヒラリスは感心する。  
そこで。

下界の人間としては、どんな下司な勘繰りをするべきだろうか?  
そう思考が流れるのがヒラリスのヒラリスたる所以である。

その男の指先ひとつ閃かせれば、クルト一国が滅びる危険を承知で……、砂久弥がそんな事をする人物でナイと知れば平然と行動に移せるのがヒラリスだった。

大概の人間は、どんなに相手の人格を信頼しても中々出来ない事だった。

己どころか己が属する世界そのものを破壊する事が可能な、そんなチカラを有する相手に…簡単に平常心を保つ事が、先ず難しい筈だった。

砂久弥にそれだけの度量、懐の広さを感じれば、人を見る目に絶対の自信を持つヒラリスは揺らぐ事がない。

「で？砂久弥は、姫君が好きだったりするのかな？」

「……よくもあっさりと尋くものだな。」

敬語は不要と云われて、あっさり対等の口調に戻し、そんな事を尋いてくるヒラリスに砂久弥は呆れた。

例えクルトの安全を確信しても、普通此処まで図々しくなれるものだろうか？白と青の位を持つ神司は苦笑した。

「確かに好きだが、何故そんな事を尋く？」

「恋敵がそんなに綺麗だと、僕の立場が苦しいから。」

礼節や儀礼を間に挟めば尋くのは難しい。

ヒラリスは苦虫を噛んだ様子で舌打ちをしたいのを堪える。

咄嗟に姫に託つけたが……普通に、姫君に拘らず出逢いたかったと願う自分を自覚して、砂久弥に向かう奇妙な慕わしさを跳ね退けた。

そんなあからさま表情を見せる相手など、ヒラリスには今迄居なかった。

親友である東の我恵那王子も、ヒラリスの事を評する時には食え

ない男だと断じる。まともに恋愛も出来ないだろうと、互いの腹黒さを認め合う仲で……所詮は国が互いの間にあるから、その言動を無邪気に信じ合う事さえもない。

そこ迄の特別扱いを自覚したかどうか？砂久弥は微かに笑って応えた。

「正直な事だ。だが、愛は深いが肉親の域を出るものではないよ。」

その言葉に嘘は感じられず、ヒラリスは安堵した。

だが安堵する理由も、姫に託すしかないだろう。

「ラッキー。良かった。」

「黒の王子の方が、紫黎花に惚れ込んでいるだろう。彼をライバルとは思わないのか？」

冴え冴えと澄んだ青銀の月が云う。

「そりゃまあ、でも君ほどの美貌が転がってる訳もないだろうし？」

ヒラリスは笑った。正直、黒の王子の事を失念していたのは確かだが、自分の心を追求する気にはなれなかった。

だから、姫に恋痴れる自分が、云いそうな台詞を選んで口にした。

「黒の王子に殺される事は有っても、恋の勝負に負けるつもりはないよ。」

その言葉に、砂久弥の眸が意味ありげに煌めいた。

いくらヒラリスでも、出逢ったばかりの無表情な神司の感情を、



読み取る事は出来なかった。

その右眸が“凍える月”とも呼ばれる2番目の月の如く清浄なブルーに、左眸は4番目の月緋耀か2番目の華月かと云う程に……金と紅蓮の紅玉に煌めくのを、ただ見惚れただけだった。

砂久弥は無表情のまま、セリカの魔力を眸に煌めかせ、淡々と告げたに過ぎない。

「さて、そう上手くいくかな。」

あの日は、結局虚勢を見抜かれてヒラリスが依頼する迄もなく、治療を施された。

月水の原液を砂久弥は所持しており、月光の詰まったそれを、何百倍にも薄めて舐める様にヒラリスは飲んだ。

劇的な変化は、既に語った通りである。

傷の痕跡すら消えた肩、熱も疲労も掻き消えて、寧ろやたらと元気になってしまった。

元気になりついでに、またもや奇妙な夢を見て、砂久弥の貌がまともに見れないおまけ付きだった。

そうして、二人で残り少ない旅路を共に辿る事になったのだ。

この神司は剣をとつても一流で、滅法強い事この上ない。  
剣士の質の良さで知られるクルトで国一番の腕を誇るヒラリスで  
さえ、青くなるほど凄まじい。

「何で魔法使わないのさ。」

ヒラリスの台詞に、淡々と砂久弥は応えた。

「彼の領域の近くで、下手に術を使うと取り込まれる恐れがある。」

「取り込まれる?」

「端的に云うなら手下にされる。」

「……………」

つまりは、操られるという事で、ヒラリスは笑顔が引き攣った。

こんな化け物に斬り付けられたら、幾つ命があっても足りない。

フルフルと首を横に振り、ヒラリスは云った。

「ご辞退します。」

「そうだろう。」

そして二人して笑った。

起伏に富んだ行程の中、急速に二人は親しくなった。まるで十年  
来の知己の様に冗談を云い合って、争いの中では助け合う仲間だっ  
た。

だが…………とヒラリスは思う。

まだ三弥山を越えてもいないのに、魔王の結界を気にするだろう  
か?

確かに魔王は強い。それは、凄いとしか云い様がない程の強敵で  
ある。

出逢ったばかりの友は、ヒラリスが考えた通り、秘密の匂いをさせていた。

月水を与えられ、治癒の術を施された時、ヒラリスは考えたものである。

この神司の目的を。

姫を救いたいからと、月のひとつである、白華から下りて来たのは、唯それだけの為だろうか？

青位の神司が、その為だけに下界に降り立つ事が、神の認める事であろうか？

身内の救出だ。変な話では無いが………と考え、それでも納得仕切れないものをヒラリスは感じる。

現に、ヒラリスが問い詰めたら、やんわりと躲された。

感情の読み取り難い表情で、時に微笑っていても、楽しんでいるのかどうかも判らない瞬間がある。

ヒラリスは、砂久弥の全てを信用仕切れない事が、残念だと感じた。

ヒラリスは誰の事も、心の底から信用などした事は無いし、今後もする訳も無い筈だった。

あの日は一日中付き纏う様にして、質問を繰り返した。

砂久弥はヒラリスのしつこさにも、全く動じた風ではなかったが、夕食の時間に、彼はテーブルを用意しつつ一言漏らした。

「尋いてみるから待つんだな。」

何を尋くのか、誰に聞くのか、テーブルを出し、食事を出現させ、最後に給仕の者まで現れた。

悠俚耶ゆいじやと名乗った少年は、席に着いた二人の為にワインを手に取る事から始めて、かいがいしく世話をし還って行った。

「う〜、ちょっと砂久弥。こんな事迄しといて魔王……っと、ごめん。王子の結界がどうかと云うのかい？」

「おや、美味しくなかったかな？」

「……………とつても美味しかったよ。昼にもコレが欲しかったと……、いや、それは置いといてさ。」

云い募るのを手で制されて、口ごもると、砂久弥はフワリと微笑んだ。

夜の月光の下で、自ら輝く月が、地上で煙る様な笑みを見せる。

美は力なり。ヒラリスは溜息を吐いて降参した。

「待つ事だ。じきにお出でになる。」

「誰が？」

ヒラリスの問いに、砂久弥は微笑って答えなかった。

その言葉を蒸し返して、今日もヒラリスは問う。

「ねえ、誰が来るのさ。今夜？明日？いつ来るのかも教えてくれな  
いのかい？」

焦れた様な問い掛けにも、砂久弥はただ笑みを見せるだけ。軽く

あしひ  
遇われてしまう事実には、ヒラリスは軽く感動さえした。

今迄ヒラリスをこんな風に振り回した人間は居ない。  
ヒラリスは扱う側の人間であり、操り遇うのは常に自分の方だったのだ。

なのに遇われて、何の抵抗感も無いのである。

自尊心の高さは月をも望む男が、だ。  
珍しい事と云えよう。

「ひとつだけ教えよう。お出でになるのは、あの方の気まぐれだが、お約束は戴いた。明日か明後日か……はたまた、黒の王子との対決の時は知らないが。」

「勿体つけないですよ。あの方って誰さ。」

ヒラリスの抗議に、砂久弥はひとつの名を言葉にする。

「リア・リルラ。」

女性にとって最高の尊称である「リア」の名で呼ばれた女性は、女神以外の何者でもない。

しかも、最高にして最大の、頂点に位置する女神である。

「リア・ダ・リアルテ……」

美しい女性に対する、賛美にも似た言葉。

女神の中の女神リア・ダ・リアルテ。そうヒラリスは呟いて、流石の彼が放心した。

砂久弥はフワリと静かな笑みを見せ、微かに視線を空へと流した。

これで、良いのですか？

確かに誤魔化せはしましたが……もう少し、教えてあげても宜しいのに。

そんな事を、心に思ったとは、ヒラリスには決して知られる事は無かった。

## 10話 ささやかな倅せ

東の森は、東の国の総ての森を示す総称ではあるが、三弥山、二久山、一夢山等の1から7迄の数字を備えた、7つ連なる山の中心に位置する、黒の王子が住まいする五幻山を、人は特に示してそう呼んだ。

東国の民は、決して王子を魔王とは呼ばない。

それは、他国にとって自明の理ではあったが、セリカの姫も総てを知る訳では無かった。

皇太子にしか、告げられる事のない事情であったからだ。

他国の皇太子とて、ただ姫と同程度の知識しか持たない者も居れば、ヒラリスの様に事情を悟る者も居る。

姫君の知識と云えば、黒の王子が本当に王子だという事実と、彼が民たちの善き王であるという事のみ。

彼がセリカの王子だと知った今も、その知識に然したる変化は無かった。

東の民は燕夜を魔王などと呼びはしない。緑の王。森の王。そして、深い敬意を込めて、東国の王、トウゼ王……と燕夜を讃える。

そう。誰が自らの王を魔王と呼ぶだろう。

掟さえ破らなければ、王は優しく寛大だ。五幻山を囲む中叟あたるだの森

にさえ足を踏み入れなければ、民を仇なす事は無い。

自らの領主が恵み深いなら、そこに魔王という名が生まれる筈も無かった。

中叟あたるとだの森に迷い込む者にさえ、王は時に寛容を示した。  
王は民の悩みを、時にその手で解消してくれる。

妖あやかしの蠢く森から慈悲をもって自宅に送り飛ばす事もあれば、不作を豊作に変え…早には雨を降らせ、流行り病や治らぬ傷を快癒させる事さえある。

善き民には慈悲が返る。

勿論、声が届かない事も有ったが……それは仕方ない事では無からうか。

その恵みは五番目の山近くの民だけではなく、東国全土に及んだ。

東の者は、自国の王と同じくらい、時には自国の王よりも多少の畏怖を含みつつも、敬愛して止まなかった。

恵みを受けられぬのは、心正しくない者だけだ。

自業自得の不作が豊作になる事は無い。真面目に働いた者には豊かな実りが与えられ、不真面目な者でも、自国の恩恵には与った。時には雨であり、昼の月が照らす恵みである。

彼は、真実と事実の両方にして、東の帝王だった。

彼自身の希みに依り顕らかにされる事はないが、燕夜の下知には、



東の国々の王八名が総て従う。

王は皇太子にのみそれを告げるだけだから、紫蘭が知らないのも無理は無いのだ。

例えば、ヒラリスの様に知ってしまう者がいるとしても、他国の者故に知り得る事柄もある。

姫の聡明さや洞察力をもってしても、そればかりは叶わない事だった。

ヒラリスはだから、軍を挙げて乗り込む事は出来ない。

クルトとセリカなら、またクルトとトウゼ王個人なら、クルトが勝てるだろう。

だが、東の連合軍とクルトでは勝ち目は無くなる。  
どんなにクルトが大国であっても、勝てない相手がある。

だからこそ、燕夜は姫に云ったのだ。

軍が向けられたとしても、それは黒の王子個人との喧嘩。だからこそ、全軍が攻めてくる事は有り得ないと。

東の民としても、王が姫を略奪して来ても、逆らう者は居ない。  
例え忠言する者が居たとしても、その者として戦になれば王を護る為に働くだろう。

ただ、略奪された姫君が、東の国であるという一事が、民が素直に花嫁の到来を慶べない理由では有っただろう。

彼は命じれば良かったのだ。

彼女が欲しいと、一言、セリカの国王に云えば良かったのである。

それを、望んで良い様な資格が無いと、自らの心を否定した。事態がどうしようもなくなり初めて、諦め切れないと気付いたのだから世話は無い。

「彼女を誰にも渡したくない。」

そして、今また。

彼はつまらない事を繰り返していた。

誰にも渡したくないと思いつつ、自分のものにも彼は出来ないのだ。

理由は先と同様。

「私には、その資格が無い。」

という、誠に下らない問題からだつた。

姫君が決める事であるのだ。そんな事は。

それでも彼は倅せだつた。

姫の声や微笑み、そして冷たい眼差しさえも、彼を倅せにした。

美しい姫君と、一日に幾度も会話を交わせる。そして、自ら理由を見つけて訪ねなくとも、時には彼女自身が呼んでくれさえするのだから。

水鏡に紫蘭花姫を映す事は無くなったが、代わりに生身の姫が目の前に居てくれる。目前に居なくても、塔の何処かに彼女が存在す

るのである。

それを想像するだけで、倅せな燕夜だったのだ。

けれど、倅せなばかりでも有り得なかった。

姫君は婚約者のいる身であり、その男は姫を燕夜から取り戻そうとしていた。そして王子は、燕夜の眉を顰ませるに足る、美貌の持ち主だったのだから。

闇の美貌を持つ燕夜とは対象的な、昼の美しさ。輝くばかりのヒラリス王子は、ユーモアに富んだ会話で、女性を楽しませる事も得意そうなのである。

燕夜はヒラリスが嫌いだ。

紫蘭の婚約者でさえ無ければ、好感を抱いただろうが、それ故にこそ嫌いだと感じた。

燕夜は彼の様に、女性の心の機微に聴くあれない。

現役の時代。政治の策謀の最中に身を置いていた頃でさえ、女性の心は不可解であったのだ。

世捨て人の暮らしを永く続けた彼が、どうしてヒラリスに勝てるだろう。

そう考えて、燕夜は落ち込むのだった。

おまけに、水鏡はもうひとつの、不快な影を映し出す。

「余計な真似を……」

夜と昼に分けるなら、その男もまた夜の住人で有っただろう。けれど闇よりも闇である燕夜と違い、彼は夜の中に射す一筋の輝きだった。

月光の化身を思わせる美貌の持ち主。

冴え冴えとした表情、眼差し、その造作だけで無く、青銀の髪や金赤の眸も、冬の月を思わせる。

だが、ひとつだけ、昼の色彩を右の眸に持っていた。まるで真昼の空の様な、その輝きを反射する湖の様な、深い、深い、青の眸。

彼もまた、紫蘭と同様に、自分と似て非なる存在だった。姫君や、ヒラリスと同じ、燕夜が持たないものを持っていた。

そして、無表情に油断していると女性はいつの間にか奴の味方……となる程、女性の扱いに長けてもいる。

不愉快この上ない。

燕夜は砂久弥を知っていた。4代目月神シエンの美しい想い人では無いが、である、リルーラ姫のお気に入り。

月の14番目の姫君。又は最後の月の女神。二つの月に住まう姫。女神の中の女神。誰よりも強い力を秘め、誰よりも自由なリア・リルーラ。

そして、誰より美しいリア・リルーラ。

燕夜はリア・リルーラの真実の姿を知らない。

それは砂久弥も同様だろう。

当然の事だった。彼女の美しさは、人間の眸には苛酷過ぎる輝きだ。

人間の姿を纏い、リア・リルーラは時に地上に下りて来る。気まぐれな女神に、セリカの皇太子であった頃の燕夜は、振り回されたものだった。

神殿で祈る習慣に、燕夜はそれでも感謝をした。

その美を愛さない人間は存在しない。特にセリカは芸術を文化を愛する国なのだから。

そして。リア・リルーラがほんの少し、その姿を解放した事があった。

女神の輝きを、人間の娘の生身に隠して、その姿だけでも奇跡を思わせた。

なのに、女神たる本来の姿を、ほんの僅かとは云え解放したら、それだけで……垣間見た燕夜は、ガクガクと膝から崩れ落ちた。

恐怖に似ていた。

だが恐怖のみで無く、人間が見る事など赦されない禁断の美に、凍りついて、震えて、動けなくなった。

一瞬の事で、すぐに彼女は人間の姿に戻った。

だが既に心臓が締め付けられ、血液の循環さえ正常を保てず、燕夜の強張った身体は、多分そのまま命を落としてもおかしくなかった。

彼女は困った様に微笑して、そんな燕夜に月水を与えた。

魔法のひとつ。治療に用いられるそれは、月の加護が強い者にしか扱えぬ代物だが、リア・リルーラには勿論難しい事では無い。

月の光を一滴溶かしとり、百万倍に薄めた水は、どんな難病にもどんな傷にも効く万能薬で、燕夜の震えも治まり、石化を見せ始めた身体の強張りからもアツサリと解放した。

女神はやはり、困った様に微笑むばかりだった。

時を越える彼女には、その治療がもたらす未来が見えただろう。それでも、月水無しには燕夜が救えない事も、やはり解っていただろう。

そして、そんな近い未来よりも……ずっと、ずっと先の光景

をも、彼女の眼差しは捉える。

だから困った様に彼女は微笑う。

大抵の場合。

倅と不倅の、片方だけを経験する者は居ない。

その日以来、燕夜は人間である事を、少しずつ止めていった。

女神に恋をしたのかも知れない。

もとは神々の飲み物である、月水の所為かも知れない。

彼の心は人間を愛する事を止めていったが、罪を犯すその日迄、

燕夜は自分の心に気付かなかった。

そして気付いた時、彼は五幻山へと逃げ出したのだ。

東国を占める王の住まう城を彼は目指し、そして主を待つ椅子は、そのまま燕夜の座すところとなった。

死を希み、死よりも重い罰を希求して、得たのは至高の座。

その皮肉は、却って彼を落ち着かせた。

そして燕夜は王としての務めを果たし、罪を償う為に、時を停められた命を日々生きている。

死ぬ事も成らず、彼は苦しく生き続けた。

少年の日に垣間見た女神の面差しを、美しい少女に見出だす日迄、燕夜の心はずっと闇の中に溺んでいた。



11話 東是王

燕夜は逃げていた。

誰も彼を追う者は居ない。燕夜が逃れたたいのは自分自身からである。

泣きたくても泣けず。叫びたくても叫べなかった。

それでも心が上げる悲鳴は、彼を脅かし駆り立てた。

常とは違い、楽しむ為に馬を走らせたのでは無い。

ただ苦しくて、恐ろしくて、彼は馬を駆る。

彼を映す眸があった。

哀しそつに眸は閉じられたが、その宝石の色彩はキラキラと空間に漂った。

そこは宇宙の海だった。

白い女神が、何も無い空間に腰掛けていた。

青と緑が濃淡で虹を描き、金で銀で碧の髪が光の粒子を煌めかせ

た。サラサラと零れた光が、蒼い宇宙に小さな川になって流れた。

彼女の傍らに、慰める様に寄り添う青年が坐す。

黄金の輝きを放つ月神は、そつと彼女の頬に口付けた。

そして、彼女に求愛する多くの神々は、遠巻きに心配そつに彼女を視つめた。



地上を映すのは、彼女と月神の二対の眸だけだった。

火急の用向きならば、通常は移動用の『機械』を使用する。科学は完全に捨て去られた訳でも無かった。

移動に際しては特に規制は緩く、夜会の折もそれは使用される。形式を楽しみつつ、利便を否定するものでも無い。

但し、魔法の代用に近い利用方法で、それを『機械』だと知る者は王族の一部に限られる。

知る者として、あからさまに口にはしない。

転移の魔法陣を模した機械は、魔法力を持たない者には区別など付かないし、力を有する者でさえ区別が付き難い様にカモフラージュしてあった。

民も同じ『魔法』を利用する。

鍬や鍬を

その中のどれだけに『機械』が用いられているか、知る者は沈黙を守るのだ。

下らない掟ではあったが、この星の住民が選択した事でもあった。

鋤や鍬を持ちつつ、ひとつの装置を置いて、植物以外の命を畑から退散させたりした。

勿論、それは法具屋にて求められる、魔道具な訳だ。表向きは。

そんな生活であるから、仮面で顔を隠した青年が操る馬は、注目

を浴びる。

息も絶えよとばかりに疾駆する馬など、賞金稼ぎに追われる『首』でしか無い筈なのだ。

首を振って、苦しげに……疾走する馬に乗る青年。

盗賊の類いには見えず、追う者も居ない様だから、行き交う者は首を捻る。

「失恋でもしたのかね？」

「うわお。それってロマンチックう。」

呑気に噂して、しかしあの仮面は？と、また首を傾げたのだ。

そして顔を隠す事は考えても、移動方法の選択には考えが及ばなかった燕夜と、不倅な疾走馬は、村道の真ん中で……突然姿を消した。

その時、燕夜は闇に飲み込まれる自分を感じた。

底のナイ、闇の中に落ちて行く自分と、巻き添えになった愛馬。意識を失う直前、馬だけでも助からないだろうか……そう思った。

意識を取り戻した時、彼は森の中に居た。川のせせらぎを耳にして、明るい昼の色彩に、草むらから上体を起こした。

そこには一人の少年が控えていた。

少し離れた場所では城を背後に、もう一人の少年が、燕夜の馬の面倒をみてくれている様子だった。

小川の水で洗われて、フルールは嬉しげに嘶いた。いや……あんな無茶をさせても、馬は燕夜を主人と思う事に変わりなく、彼が意

識を取り戻した事に気付いて親愛の情を示した様に見えた。

傍らに控えた少年がそつと身を屈め、優雅に礼をした。

もう一人も馬の嘶きに促されて燕夜を振り返り、こちらは無造作にヒョイと会釈を寄越す。

燕夜は頷く事さえ出来なかったが、少年達の眸には、寛いで座っている様に見えた。

此処は一体何処なのか？そんな事を思ったが、その疑問は少年の言葉で解消された。

真昼の空の様な髪は流石に珍しい。輝く様な笑顔で、少年は城を示した。

「此処は東の森。五幻山です。トウゼ王の塔がアチラです。」

傍らに跪いて告げると、塔を指し示して立ち上がる。

そして、差し延べられた少年の手を取り乍ら、燕夜は塔を見上げた。

セリカの王子をして、美しいと思わせる城の佇まいの中央に、高い塔がある。

「あれが……トウゼ王の。」

「はい。どうぞ、お一人でおいで下さい。私には許されておりませんので。」

そう云うと、少年は貴人に対する礼を取った。

最初の時と同様に、左手を胸に当て、ゆっくりと身を屈めた。

燕夜は頷いて塔を目指した。

どう見ても王族か、それに準じる立場にあるだろう少年が、己に最高礼を尽くす。

その事に多少の戸惑いを抱きはしたが、彼にとっては最早どうでもいい事だった。

燕夜は此処に、死にに來たのだから。

死を望み、死よりも重い罰を希求して、彼は馬を駆けさせたのだ。

そして、塔の高きに臨む。一段一段、足を進め乍ら、彼は救いを希う。

生きて赦される事から……逃れたかった。

誰も責めず。誰もが、彼を慰めようとする。そんな状況から、燕夜は逃げ出して來たのだ。

罰を望み。

死を求め。

そして、玉座を前に、彼は跪いた。

金色に輝かんばかりの美貌の主は、けれど玉座には着かなかつた。玉座の傍らを通過して、ゆっくりと燕夜の目前にある、その石段を下りて來る。

「王よ。」

燕夜は訴えた。

「どうか私をお救い下さい。私はセリカの皇太子、梨燕紫夜蘭と申す者。我が王座への権利を、どうか捨てる事をお許し下さい。」  
「セリカの王子よ。ならば玉座には誰がつく？」

燕夜に応じた声は、ひどく甘く、優しく、けれど平伏さずにはおれない威厳を備えていた。

誰をも従える美しい音色に、燕夜は震えつつも応じる。

この、圧倒的な敗北感に、懐かしささえ感じ乍ら。

畏怖する程の「美」。女神の輝きに凍りついた自分。

そう。金の王は、女神に似ていると燕夜は思った。

姿形の相似では無く、人の持ち得ぬ「何か」を発するが故に。

それは光で有り、美で有り、力そのものだった。

トウゼ王は、この星総て支配する事を、可能とする存在だと云われる。そして誰も、彼女 に逆らう事など出来ない。逆らおうとも思えない。

それが事実だと、燕夜は今知ったのだ。

「弟に、梨影砂黄景と申す者が居ります。我が弟乍ら秀でたる者。どうか、あれに王位を下さいます様、お願い申し上げます。」

セリカの存続だけは、認めて貰わなければならなかった。王位は最早、彼にとって煩わしいものでしか無かったが、国を自分の所為で滅ぼしては成らぬと考えた。それが燕夜に命を棄てる躊躇させた理由の総てだった。

神々への約定は総ての掟に勝り、一方的な破棄は破滅を呼びかねない。

立太子の典礼を終えた燕夜は、次期王として報告済み……つまり

王位に就く事を神々と約定を交わした事となる。

神から否定する事は出来ても、人の身でそんな不遜は赦されない。王族の無礼は、国を滅ぼす意思を疑われても仕方ないとされていた。

先ずは別の人間に皇太子の座を移す許可を得なければ、燕夜は死ぬ事も出来ない立場に在るのだ。

「そなたを失う事は、セリカには痛手となるう。」

優しい声なのだろう。だが、存在そのものが発する圧力は、燕夜を圧倒し顔を上げる事も出来ない。

重圧に押し潰されそうになり乍ら、彼は耐えるしかない。

「だが、代わりに東国は良き王を得る。」

続けられた言葉の意味を計り兼ね、戸惑ったのは一瞬。把握した内容に、燕夜はパニックを起こしかけた。

「立つが良い。そなたは今この時よりトウゼ王と成る。」

肩に掌の感触を覚えたかと思えば、燕夜は目眩に襲われた。

気持ちの上でも、身体的にも。

軀の内から、造り変えられる様な、一瞬の激痛と吐き気と惑乱と……理解。

圧倒的なナニカが燕夜の中に入り込み、頭の中まで掻き回し、軀中を駆け巡り、総てを『変化』させてしまった。

衝撃を振り払う様に、燕夜は頭を振った。心の何処かで理解した

現実も一緒に、振り払いたかった。

固い表情のまま、燕夜は美貌の主を見上げた。

「何を仰有るのですか……貴方が王でしょうか？」

悲鳴にも似た声が、だが力無く発せられた。

だが、燕夜は既に相手から受ける謂れのない敗北感も、震える程の圧倒的な畏れも感じてはいない。

重圧は消え去り、その力溢れる美貌を直視出来る自分に、燕夜は混乱の余り気付けなかった。

金色の主が笑う。

その輝きは流石に燕夜を怯ませたが、それでも眸を逸らす事なく、顔を上げたまま立ち尽くす。

「私は王では無い。トウゼ王は前の者も、その前の男も、みな塔を出て行った。いつも穴を埋める為に、私は人材を派遣し続ける羽目に陥る。」

燕夜は訳が解らないと首を振る。

だが、理解する事は必ずしも必要ではないと気付いた。望むのは罰だ。死よりも重い罰か、せめて死を。

「私は……王と成る為に参った訳では有りません。」

だが、言葉が続け様として、笑みひとつで制された。

唇に、眸に、淡い笑みを浮かべ、その存在は宣告した。

人では有り得ない、美貌の存在は、燕夜に現実を突き付ける。

「これは決定事項だ。」

流石に相手の正体に気付かないままでは居られない。

逆らう事など赦されない相手は……それでも、と抗いたい気持ちを、燕夜の眼差しに読み取ったか、単に続けられる筈の説明だったのか。

「そなたは罰を望むのだろうか、トウゼ王は皆そう云う。」

燕夜は困惑も露わに、美貌の存在を視つめた。

直視し続ける事は、多少の負荷を燕夜に与えたが、その苦痛に寧ろ縋る思いだった。

「そう。皆、死を望み此処に来る。だが、死に逃げる事も出来ない己を知ってもいる。」

その通りだった。

死に逃げる事も赦されない己を、燕夜は自覚している。

「そして、死よりも重い罰を求める。死ぬ事も赦されない罪を償おうとして、彼らは此処に辿り着く。」

ならば何故、それが王に成る事となるのか。

疑問は、質問の形で、燕夜に突き付けられた。

「君は今後、何年生きると思っている？」

燕夜は今年18才になる。

東の民の平均年齢は30〜40才。



「永くとも、五百年は無いかと……………」

普通なら…………その筈だった。

17才迄は、1年毎に年齢を重ねる。成長が停止して、次からは二十年毎に。その間は若い軀のまま、ゆっくりと老成していく。

その時間は、今の燕夜には苦しみでしかない。

南の民ならば、百年も生きれば得られる死が、今は羨望を呼ぶ。一年毎に年齢を重ね、肉体迄が若き日の姿からは見る影もなく老化して、死に赴く彼の国の血を畏れる人間は多いが、燕夜はその血に深く憧れを抱く。

なのに…………。

「トウゼ王の地位に就く事は、永遠を意味する。君の軀は時を止め、王で在り続けるのだよ。」

「そ…………それは…………」

先程から、否定し続けた事実を突き付けられ、燕夜は絶句する。

やはり、という思いと、まさか、と思う気持ちが闘ぎ合う。

現在の死のみか、未来の死さえ失われたのだ。

燕夜は唾い出したくなった。

最早、自分を欺く事も出来ない。

「私は…………既に王のですか？」

あんなにも恐ろしかった相手。自分より遥かな高みに存在する、

圧倒的な力の差と、人間が持ち得ない美貌。  
不死の一族。

既に、気付いていた事実を問う。

「貴方は、神なのですね？」

それは質問と云うより確認だった。  
頷いて彼は応えた。

「4代目月神、シエンだ。」

その名乗りに、衝撃さえも無い。  
肩に触れた掌は、何処まで燕夜を造り替えたのだろう。

神々に準ずる者に。不死の一族の末端に加えられ。燕夜は、シエンに対する畏れを、自らの意志で抑えられる様になってしまった。

主月神が、遥かな高みの存在なのは相変わらずだが、人間が神に  
相対する時の原始的な、生理的なそれは最早ないのだ。

「お尋ねしたい事が有ります。」

燕夜は、自分が人間では無くなったのかと考えた。  
だが、それは事実として自覚した後の足掻きでしかない。  
口にした質問は別の事だった。

「他の人……私の前の王達は、どうしたのですか？」

塔を出て行つたと云う彼等は、一体どうしたのか。シエンの云い  
方は、彼等が王で在る事をやめたと、そう聞こえた。だが、シエン

は永遠に王で在り続けると云ったのではなかったか。

「何故出て行つたかを聞きたいのだね？」

「はい。」

シエンは応えた。

燕夜と同じ心で塔に致り、同じく王と成つた彼等のその後を。

「罪が赦されたからだ。彼等は罰を受ける事をやめ、王で在る事をやめ、平凡な倅せを求めたのだ。」

そう云つて苦笑した。

「生きる事が苦で無くなれば、王の地位は恩恵にも成るのに。皆、要らないと云つて、出て行ってしまふのだよ。」

そして、何と云つて良いのか解らぬ燕夜に向かつて、シエンは続ける。

燕夜には有り得ない未来を。

「そなたには、せめて千年は保つて欲しいものだね。いや、そうでなくとも良いから、此処でトウゼ王として妻でも迎えてくれたら云う事はないな。」

燕夜は困惑して言葉もない。

シエンは燕夜が罪から解放される事を前提として話をしている。だが、そんな事は有り得ないと、彼は知っているのだ。

死を希求し続け。

生き続ける罰。

そんな重い罰を与えておいて、一体何を云うのだろう。

「そなたは生まれ乍らの王だ。きっと、罰を終えても残ってくれ  
ると、期待しているよ。」

燕夜の困惑に気付かぬ訳でも無かるうちに、神々の長たる青年は、  
云いたい事を云って、姿を消した。

後には、一人残された燕夜のみ。

呆然として、彼は神々の考えは理解出来ないばかりに、そつと  
頭を振ったのだった。

女神が与えた月水が、彼の内に眠る「能力」ちからを目覚めさせ、彼は  
知らぬ間に罪を犯した。

その力の存在に気付かず、弟を死に追いやったのだ。  
そして、弟の死にも、弟を殺したのが己だという事実にも、打ち  
のめされる事の無い自分自身に、燕夜は愕然とした。

人間としての温かみを、自らの心に見出だせず、そんな中で、誰  
の事も愛してはいなかった事実にも気付いた。  
いや、唯一人、愛情のカケラを感じたと云えるのが、皮肉にも命  
を落とした弟だったのだ。

他にも弟は居たのに。

自分には妻も居たし、両親だって居た。なのに愛していた筈の彼  
等の誰一人として、本当には想っていないかったと知ったのだ。

誰より大切な梨那季亜の死に依って、燕夜は己の罪を知った。  
取り戻せない大切な弟を失った一方で、心はもうひとつの罪に悲鳴を上げたのだった。

助けてくれる相手は居なかった。唯一人、愛せるかも知れない季亜はもう居ない。

彼に突然発現した“力”に周囲の者は慌てたが、彼を非難してくれる者は一人も存在しなかった。

誰もが彼に同情し、慰める事に心を砕いた。

神司の修業をしていない彼に、何が出来たと云うのか。皆がそれを不俚な事故だと云って、彼を責める事など思いも寄らない。

彼にはそれが何よりの苦しみで、発現したばかりの『力』が暴走しようとするのを抑え切るのが精一杯だった。

幼い頃に、遅くとも17才迄に、能力は顕れるものには顕れて、道を示すものだった。

力そのものが、先に顕れる例も無いでは無いが、大抵は、神司なり導師なりが『印』を見出だし『塔』に修業に出されるのが当たり前だった。

その為、成長が停止する迄、東の民は皆、定期的な力の有無のチェックを怠らないのだ。

このような『事故』を起こさない為に。

けれど、事故は起きた。

彼の内に眠っていた『力』が、本来ならば、一生眠ったままである筈の『能力』が、導師の『眸』をも眩ませる、深く強いそれが…  
…月水に依って目覚め、ゆっくりと頭をもたげたのだ。

妾腹ではあったが、季亜は一番可愛い弟だった。

すぐ下の同母の景影も、仕事では一番頼りになり、燕夜に忠実では有ったが、やはり季亜とは比べられない。

生まれて間もない頃から、自分の後ろをちょこちょこ付いて来る存在が、彼は愛しくてならなかった。

季亜以外に、こんな風に心を暖めてくれる存在を、燕夜は知らない。いや……一人だけ知ってはいたが、その考えは余りに不遜なので数には容れられるものではない。

季亜以上に愛しく、燕夜の心を占めるのは、一人の女性だった。

いや、本当は、一人……とは云えない。その女性は、女性で在る前に神であった。

その女性に対する想いと同じくらい重みを持つものは、燕夜には仕事しか無かった。

王家の務めは、神々に与えられた職務であるから、全うするのは女神への忠節を示す事でもある。

女神に拘らず、嫌いな仕事でも無かった。

寧ろ、企み、陰謀、駆け引き、それらを内包した政治のゲームは、彼を楽しませました。

季亜より重いものは政せいだけ、冗談の様に口にする燕夜だったが、まさしくその通りだったのだ。

美しい妻が、両親が、弟妹達が居る。

その中でも、一番の美貌を持つ彼は、皆に愛されていた。

王は彼の手腕を自分以上だと認めていて、殆どの政務を彼に任せていたし、早めに王位を譲る事も考えた。

燕夜が二十歳になったらと予定していたが、この調子なら明日にも譲位して大丈夫そうだと、未だ王自身が二十歳にも達する事のない年齢で考えたのである。

民も、兵士達も、燕夜を敬愛した。

倅せの形が、そこには存在していた。

なのに、ひとつの事件がそれを瓦解させる。

音を立てて崩れ散った。

その音色は、皇太子が愛する弟の声から始まった。

「兄様。僕、結婚したくないよ！あの娘、意地悪なんだもん！」

可愛い弟の台詞は燕夜を面白がらせたが、手が空く迄、相手は出来そうに無かった。

皆と一緒に、その愛らしい我が儘を笑って。扉の前に立つ未だ10才に成ったばかりの幼い弟を、外に出す様にと視線で景影に命じた。

「季亜。私達は忙しいんだ。庭で遊んでおいで。」

景影の言葉に促され、大臣の一人が幼い王子を外に案内しようとしても、肩に置かれた手を払った王子は、部屋の中まで入って来た。その利かん気を、一同微笑ましく見たが、忙しいのも確かだった。

「季亜。皆の邪魔になる。出なさい。」

景影の言葉に泣き出しそうになり乍らも、一番大好きで、一番優しい、そして一番年長の兄の足元まで駆け寄った。

「ねえ、兄様。ラズってばヒドインだよ。イジメルの。」  
「季亜。悪いが後にしておくれ。ラズイアーリ姫の事も、後で話そう。」

優しい宥める口調だったが、泣き出す寸前だった子供は、頼みの綱にも見放され、盛大な泣き声を上げた。

燕夜は季亜に逃げられた大臣を振り返った。

「波雷、季亜を連れ出してくれるか？」

「はっ。さ、那季亜さま。」

だが、大臣などに負けて堪るかと思えば手足をバタツカセ、季亜は暴れた勢いのまま更に泣き喚く。

神々の怒りを報せる、サイレンの様な声だった。

こうなると、燕夜が話し相手になる迄、収まるものではない。

小さな野獣は誰の手にも負えないのだ。

「兄上。どう致しましょう……コレ。」

既に、季亜に甘い長兄が、仕事を放り出して行くものと決め付けた台詞で、途方に暮れた景影が聞いた。

「どうしたもこうしたも……それは、私がやるしかないだろう。」

仕事が多くなって忙しい中、王は燕夜に任せ切りで留守をし、その上……神への上奏文を要する事案が幾つか。

王宮では除目の季節で叙位の決定や人員の編成、つまりは人事の問題でそうでなくとも繁忙を極めた。

そこに王子二人の縁談が纏まり。特に他星の姫が相手の季亜の件



では、上奏文は必要不可欠だった。

そして、問題無く纏まった景影の縁談は北国の姫との婚約が調った後に、何の因果か到来した銀狼の一族からの求婚。

断つたら色々と難癖を付けて来て、一応神々の系譜に列なる相手だから、やはり上奏文は必至だった。

神々に対する奏上は、幾つかの制約が有り、セリカの国では何人かが心得、権利を有するが、この問題は王族が出すべき文で有り、となると王か燕夜しか居なかった。

他にも細々と厄介事が重なり合い、通常の政務も滞るままにしてはおけないし、誰に任せても決裁は燕夜だし、とにかく大忙しだったのだ。

流石に子供と遊ぶ暇は無かった。

景影は書きかけの上奏文を呆然と視つめたが、燕夜程神々の問題を疎かにする愚を知悉しては居ず、そんな質問も出来たのだろう。

燕夜は溜息を吐き、季亜を見遣る。

「季亜。後でいくらでも聞いてやろう。だから今は勘弁してくれないか？」

この状態でも優しい声で告げたのは、燕夜の自制心の賜物だったろう。

だが、常ならば泣き止む筈の、燕夜からの説得も、この日は効果が無かった。

サイレンは音を大きくするばかり。

大臣達は幼い王子を捕まえる事も出来ない。

執務室には不満と苛立ちが溜まり始める。

このままでは仕事にならず、だのに重要な、とっくに仕上がっているべき案件が書類の形で山を形成し、圧迫してくる。

季亜が姿を見せた瞬間に流れた仄々とした空気は既になく、殺気に満ちていた。

泣いているのが王子で無かったなら、誰が怒鳴り声を上げてもおかしく無かった。それこそ舌を引っこ抜き、窓から棄てたい心境だろうな……等と燕夜は考えたが。

そんな彼自身にも、余裕など無かった。

「季亜。いい加減にしないと、窓から放り棄ててしまうよ。仮にも王子なのだから分別というものを弁えなさい。」

だが、やはり可愛くてならないのか、言葉の内容とは裏腹に、優しいとしか云い様の無い声で告げてしまう。

「兄上……甘い。」

景影が呻き、周囲も苛立ちを忘れて吹き出しそうな、甘い兄莫迦振りだったのだが……。

「何だよ……兄様のバカ！兄様は僕より、こんな書類が好きなんだ！……うわああああん！！」

最大のサイレンが鳴り響いた。

事も有るうちに、那季亜王子は書類の山を掴んで、窓から投げ捨てた。

その場に居た全員の頬が引き攣った。

そして、いつも、この人だけは怒らせては為らない。そう皆が思う紫夜蘭王子の、低い、低い声が、響いた。

「書類以下だと自ら云うなら、自分がそこから飛び下りるが良い。迷惑ばかりかけるのを権利と思うなら、……季亜っつ！？」

静かな淡々とした口調が、何とも恐ろしい。室内の温度が比喩で無く下がった気がして、皆が寒い空気を耐える中、燕夜は不意に眸を睜った。

「季亜！やめなさいっ！！」

彼等が、王子の言葉に釣られてバルコニーに視線を移した時には、もう遅かった。

いつも、何気なく『遣う』自分の声に、いつの間にか、催眠効果が伴っていた事に燕夜が気付いたのは、その時だった。

そして、医師や導師が集められ、宮廷の中を走り回ったが、それは季亜の為では無く、皇太子の為であった。

季亜の死に依って、暴発した燕夜の『力』は、暗示能力だけでは無かったのだ。

バルコニーから飛び下りる季亜の姿に、彼は叫んだ。

その声と共に、室内に嵐が吹き荒れた。

これ以上、誰も傷付けてはならないと彼は考え、人払いと『塔』に人材の派遣を要請する様に命じた。

彼は誰も傷付けては為らない。皇太子として、自らの民を護る立場に在るのだ。

そして、ふと脳裏を過ぎる考え。

「では私は、王子の立場に無ければ、彼等を守ろうとはしないのだらうか？」

それには否定の声が返った。

だが、守りたい……とは全く思わない自分を、その時、彼は自覚してしまったのである。

誰の事も、愛してはいない傲慢な己を、燕夜は知ったのだ。

そして、派遣されて来た神司に依ってしか、押さえられない程に大きな力が、やっと仮の封印を受け入れた頃。

燕夜は既に、自らの心に巣くう、闇の深淵をしっかりと覗き込んだ後だった。

「貴方は自らの力を制御する術を学ばねばなりません。わかりますね？」

「ええ。わかります。」

「これは不倖な事故でした。心の痛手は深いでしょうが、二度と繰り返さない為にも、貴方は白華に赴くべきでしょう。」

種々の塔に至る拠点が点在する、女神の月。17番目の月、白華。そこに行く事は、権利であると共に、義務でも有るのだ。

燕夜は神司の言葉に頷きつつも、何も聴いて無かった。既に、彼は五幻山に赴く事しか考えていなかったのだ。

そして、望みもしないのに、塔で学ぶあらゆる事を、燕夜は一瞬で手にした。

神の御手に依り、罰を享ける為に、それは必要な事だったのだ。  
燕夜は自分の素質以上の『力』を手に入れ、けれど最早制御を誤る事も無くなったと知る。

人間では無くなったと知る。

この『力』は人の中には入らない。人には扱えない。そして、燕夜は死なない軀まで、手に入れた。

死にたくて、トウゼ王に謁見を求めたのに、自らがトウゼ王に成った。

それは、何という皮肉だったろう。

彼は季亜の為に黒い衣を着て、季亜の為に自分の不倖を嘲笑った。

そう。その為に彼は此処に来たのだ。

死んでしまった季亜の為に、燕夜は望み通り、死にたくても死ねない不倖を得た。

哀しんで、苦しめ。

季亜の為に。

季亜の苦しみ以上に、私は苦しまなければ為らないのだから。

燕夜はそう考えた。

決して、季亜はそんな事を望みはしないと知りつつも、他に方法を知らなかった。

燕夜は自らに生き続けるという罰を課される事を良しとした。

それは彼には何よりも苦しい、何よりも重い罰だったが故に。

主月神が愛するリア・リルーラの要請の下に、セリカの王子を皇太子から外し、塔を与えた。

力に目覚めし者が塔に至る義務は、五幻山の塔のみ形が変わる。

そこは東国を統べる王のみの塔。

王に帰属する塔。

神が撰んだ王に従い扶けとなる。

そして、此処に永年のトウゼ王が誕生する。

神々の太宰。当人が意識しないまま神司の資格も得ていた為に、単なる太宰ではなく、彼自身が神として君臨する事を許された王。

トウゼ王。

神々が望んだ王。

燕夜は知らなかったが、その名は生まれる前から彼のものだった。

東の王は是なり。

神々の祝福は、総ての王家と神殿にて謳われた。

燕夜は、それも……ずっと永い間知らないまま、王としての義務を果たし続けた。

知ったなら、何と面倒な罰だろうと嗤った事だろう。

そんな祝福は、正直迷惑でしかなかった。



## 12話 背中合わせ

あのテーブルはもう出ないのかなあ……と、こっそり残念に思いつつ、焚火に翳し地面に突き刺した串に、ヒラリスは手を伸ばした。やはり、アレだろうか、近場の魔法は魔王に気付かれちゃうって話なのだろうか。

砂久弥の言葉を思い出し、ヒラリスは一応王子の自尊心を大切に  
して、余計な事は云わなかった。

あっちが食べたいなあ、等と口にする事は一国の王子として情けないではないか。

「そっぴや、砂久弥は黒の王子と個人的に面識有るの？」

代わりの世間話は、だがちょっとした衝撃を呼んだ。

砂久弥があっさりと頷いたからだ。

「ああ。」

「え？マジ？」

ヒラリスは驚いた。普通云わないか？そっぴや事は尋かれなくても云うんじゃないのか？

「へえ？どんな奴？」

内心盛大に苦情を述べた。しかし、それを押し隠して、普通にのんびり尋ねたが、うっかり奴呼ばわりだった。



「良い奴だよ。」

砂久弥は特に気にもせずに応え、五幻山の方角を眺める。

無表情に近いが……ヒラリスには思わし気な、……黒の王子を案じるかの様な眼差しに感じられて、一瞬だが強烈な苛立ちが沸き立ち抑制した。

ヒラリスには関係無い。例えば、砂久弥と黒の王子が知り合いとして、その付き合いが存外深いもので有ったとしても。

そう。

黒の王子が、どんな想いでトウゼ王の座に就いたかを知ったとしても、それが……女神の素を両の眸に映した所為で、心が欠けてしまった事が、そもそもの原因だったと知っても……ヒラリスは気にしないだろう。

実際に目の当たりにしても、そんな甘ちゃんをせせら笑っただけだろう。

黒の王子はヒラリスにとって、もっか最大にして最強の敵で有ったのだから。

そして今も、黒の王子様さえ存在しなければ、こんな状況は無かつただろう。

三弥山を漸く後にしようという場所で、彼等は昼食を終えた訳だが……ヒラリスは妙な感情を忘れ、砂久弥も五幻山の空など眺めている場合では無くなった。

六京山の最大の派閥を持つ、名高い山賊が一斉に襲い掛かって来

ただ。

「魔法で解んなかったのかい！？ねえ、青の導師様っつー！！」

「使ってもいないのに、解る訳が無いだろう。それこそそんな事も解らないのかっ。」

罵り合いつつも彼らは敵をぶった切る。

何でこんな事に……と、襲われる度に思うが、仕方が無い事かも知れない。山賊にしてみれば、も彼らは他人の縄張りを勝手に荒らし回っているのだから。

彼らが例え、通過するだけじゃないかと主張したとしても、そんな云い分が通用する筈も無い。

そして、多勢に無勢どころでは無い敵の数に、二人と二匹の馬は、しっかりと……はぐれてしまったのである。

しまった……と呟いた時には遅かったのだ。

砂久弥に近付こうにも、間には沢山の雑兵……もとえ、悪人たちで溢れていたのだ。

敵を斬り捨てて、もう一度砂久弥を探す為に視線を動かす余裕が出来た時には、すっかり姿が見えなくなっていた。

「とんでもないなあ……っつと」

振り下ろされた剣を咄嗟に避けて、ヒラリスはひょいと手近な男の首根っこを掴んだ。

二度目の襲撃を躲しつつ、他の敵からの攻撃の盾とした。

うっかりその男を斬ってしまい、新しい敵が猛烈に怒り狂ってヒラリスに突進して来た。

「おっと、……あ、ラッキー」

ヒラリスは避けた拍子に、そのまま目前でバランスを崩した敵の背中を思い切り足蹴にした。

思った通り、道が開ける。

何とか作ろうと苦慮していた突破口である。

「あつとゴメンね。君も、君もね。はいゴメン。」

何がゴメンだと叫ぶ男の頭も断ち割って、ヒラリスはもう一度、悪びれずにゴメンと云った。

後は走るのみである。

右に左に剣を振り下ろしつつ、とにかくヒラリスは走った。

「うわっと。よいしょ……っと。あらよ。」

木々を盾に逃げ続け、時に敵に斬りつけ乍ら、走り続けた彼の目前に高い茂みが現れた。

その手前に立つの敵の腹をザツ　！！と横薙ぎに斬り払うと、そのまま倒れ込んで来る男の肩に手をかけて、勢いを付けて飛び越える。

茂みの向こうには、しかし敵が四人。

ヒラリスはスツと冷えた眼差しで四人の位置を見て取った。

地表目指して落下し乍ら、先ずは一人の頭を蹴り上げ、蹴った頭

にそのまま蹴り潰す勢いで足を下ろし、ガッツリ地面まで体重を掛けて着地し乍ら、右手に立つ男を剣で突き刺す。

返す刀で左手に薙ぎ払い、三人目を斬り捨てた。

「ヤリイ。僕って天才かも」

返り血に塗れ、口にする言葉はひどく軽い。

戦場などでは、却ってオチャラケてしまう性格であった。

「だあって正気で人なんて殺せないもんね。僕って平和主義だからあ。」

解るでしょ？と最後の男に問い掛けると、相手は奇声を上げて突っ込んで来た。

「バケモノがあつ！！」

「し……っつれいだね。……君でしょ。それは。」

足元に転がる、出来立ての死体に云い置いて、ヒラリスは逃亡を再開した。

砂久弥の無事に関して、彼は心配していない。

ヒラリスが心配なのは、彼が自分を見付けてくれるかどうかである。

「まさか、こんな時まで結界がどうのって云わないよねえ。」

呟きつつ、敵を倒し乍ら走り続けた。

体力は無限では有り得ない。

取り敢えずは、何処か身を潜める場所を見付けなければならない

と、そう思った。

今は未だ、考えるべきでは無い。戦場にしろ、王子の冒険にしろ、何で命のやり取り等が必要なのか、ヒラリスには理解出来ない。神々が統べる世界で、望めば完璧な平和だって叶えられる筈だった。

下らない理由で、だが神々との掟に反しない戦を仕掛ける国や、せつかく平和に生きられるのに、わざわざ刺激を求めて山賊などやらかす逸れ者。

世の中みんな莫迦ばかりだ。

ヒラリスはそう思ったが、実際に今の世界に生きて、その戦闘の場に在るなら……いちいち考える事は自らの命を縮めかねない。

自分が死ぬ気などは更々無くて、だからヒラリスはこんな時は何も考えない。

血も、絶える命も、残酷な光景の総て、何を見ても心を動かさないと決めている。

そんなヒラリスが指揮官として、戦士としても、総ての戦闘に秀でた能力を発揮するのは、皮肉な話ではあった。

砂久弥は基本的に誰にも云わないし、その欲求を積極的に叶えようともしない。

だが、その一点で、自分が壊れていると知っていた。

砂久弥は人と斬り合うのが好きだ。

だからこそ、女神は彼にヒラリスの護衛を命じたのである。

とは云え、人を殺すのが好きなのでは無く、殺し合う緊張感が好きなのである。その緊張感の中、打ち勝ち、敵を倒す。

それが、砂久弥の楽しみであった。

どちらにせよ、褒められた趣味では無い。

だが、砂久弥は思うのだ。こうして敵を斬り結び乍ら、考える。

彼らだとて、好き好んでこんな商売をしているし、此処に居る人間総てを、一瞬で消滅させる武器も存在するのに、自分も含め皆が剣や弓程度しか用いない理由というものを。

結局、人間は争いが好きだよな。と結論は出て来る。

そのみでも有り得ないが、血を嫌う人間ばかりで無いのも確かだ、と砂久弥は思う。

好きなだけあって、彼は流れる様に剣を操る。

流麗な動きで、敵を屠り微笑う。

戦っている時の彼の笑みは、酷く鮮やかで、この上なく美しい。

それこそ、神々に愛でられるのも頷ける程に。

優しい気に、愛おしむ様に、そして酷く楽しそうに、彼は血を溢れさせ倒れゆく敵であった存在を視つめる。

彼の周囲にいる敵は一人減り二人減り、そして砂久弥を取り囲む男達は、自分達が一体何をしたらだろうと、我が身の不運と不倖を嘆き、逃げ出したり、数だけを頼みに襲い掛かったりした。

彼は彼の愛する敵に、大抵愛して貰えない。

彼らは、きつと許されるなら、砂久弥が先程思い浮かべた武器を使用しただろう。

ただ、どんな星にもルールが有る。

武器の名で使われる物に限っては、娯楽のみで剣だの弓だのを使用訳では無いのだ。存在しないだけである。

そして造る者が居たなら、彼は国や神々に罰を与えられる。使用する者にも、それは同様の事が云えた。

砂久弥と違って、彼らはそれらの武器を、使用しないのでは無い。使えないのだった。

この場合、砂久弥を喜ばせる為の掟に見える光景ではあった。

その剣は、どんなに血の脂に濡れても、決して切れ味の変わらないものだったので、砂久弥は敵を斬っては放ち、斬っては放って足を進めた。

結局はヒラリスと同じ行動なのだが、砂久弥の場合、逃げているのは敵の方なのである。

彼に出逢った事を、生き残った者は、きっと一生忘れられはしないだろう。

彼との遭遇を機に、真人間に立ち返る者は多い。きっと、今日の彼らも、身に染みて知った事だろう。

人間には、己には分を弁える事が必要だと。

砂久弥は口の端を笑みの形に変える。

この場でさえなければ、誘い込まれずにはおれぬ妖しい迄に艶やかさだ。普段の砂久弥を讃えるなら玲瓏。同じ貌の別人が居るかの様だった。

凄艶にして、凄絶。

だが、その笑みに誘われる者は一人として存在しない。

「ひっ………！」

砂久弥の眼差しが注がれれば、一人、二人と逃亡に移る。  
手近な者はフワリと飛び掛かり斬り捨てたが、他の者は追い掛ける迄も無い。

「山賊退治に来た訳でも無いしな。」

そう云いつつ、それを一番残念に思うのは外ならない砂久弥だっただろう。

彼はスツと右手を上げた。

逃げ遅れ、すっかり腰を抜かした男が、それだけで悲鳴を上げる。だが、剣の柄を残して、刀身が掻き消えた。代わりの様に、それは弓の形を成して砂久弥は矢をつがえると、すっきりした姿勢で無造作に放った。

矢の数に限りは無く、弓に添えた手の中に次々と現れるのだ。そして、砂久弥は身体の向きを変えては次々と射た。

狙い撃つのは剣と同様、砂久弥の腕である。

性能がいくら良くとも、見合う腕前が無いとクズでしかない。そして、その性能も、砂久弥の好みで、ごく普通の剣と弓の働きしかないのだ。

材質や切れ味、形を変化させたりの二次的なものはアップしてあるが、勝手に照準を合わせたり、敵に斬り掛かる様な武器は、砂久弥の好むものではない。

そして、彼は下手な万能の自動の弓矢や剣よりも、余程確かな結果を残した。

あっという間に、眸に映る敵を葬り去り、彼はずっと腰を抜かしたままの男に視線を移した。



「ひつつ！た……たすけつ……助けてくれっ！」

この男が、助けを求める相手を助けてやっていたとは思えなかった。逃げる敵も、助命を嘆願する者も、きつと殺してきた男達に、砂久弥は容赦を与える積もりは無い。

砂久弥は本気で斬り合う闘いを好んだし、そうやって倒す方が楽しい。だからと云って、逃げる者を見逃す理由には成らなかった。つまり逸れ者など、一人でも減った方が良く考える砂久弥だった。

そこに新たに近づく者達がいると砂久弥は気付いたが、気にもしなかった。

先ずは目の前に居るそれを始末しようと考える。

「おま……青い髪。蒼月の利夜！？」

ゆっくりと近付いて来た砂久弥の容貌に、記憶を刺激するものがあったのか、その青銀の髪のみを頼りにした言葉か、目の前に下りて来た刀に向かって叫んだこの言葉が、男の末期となる。

砂久弥は珍しい表情をした。

あからさまな嫌悪が、その眼差しに表れていた。

「それは私の相棒の名の様だが、私をあんな化け物と一緒にしないで欲しいね。」

同性でさえ妙な気分になる低音が、不快そうに告げた。

だが、それを耳にした男達は更なる恐慌に陥っていた。

カシヤンと砂久弥は剣の柄を握り直し、振り向き様に一閃を放つ。

「背後からの攻撃とは卑怯者が揃ったものだな。」

五人が斬り掛かり、三人が一瞬で屠られた。男達は倒れた仲間より、砂久弥の言葉より、尚先程聞こえた声が脳裏に焼き付いた様だった。

「じゃ……っじゃあ、砂久弥っ！？夜月の砂久弥が何でこんなところにつっ！！」

利夜よりも砂久弥の方が怖いと云わんばかりの態度は、不愉快極まりない。

砂久弥の最新の記憶に依れば、女神に相棒として押し付けられた……もとえ、無理矢理組まれた……もとえ、面倒を……とにかく、その時の利夜は、盗賊の村ひとつを丸ごと火炙りにした。

人肉が焦げる臭気と、その悲鳴は、砂久弥の美学とは折り合わなかった。しかも、残酷が過ぎるといふものでは無いか。

砂久弥を前にした男達が、利夜と砂久弥のどちらを優しいと思うか……彼らに見れば恐らくは、五十歩百歩と答えそうなものだった。

現に、砂久弥は夜月と呼ばれ、利夜は蒼月と呼ばれる。

蒼月は夜月の別名だったのだから。

「ひっ！夜月の砂久弥っ！」

「青い髪の砂久弥っ！」

もはやパニックしきりの山賊は、どいつもこいつもへっぴり腰で、砂久弥は全然楽しめそうも無いなと更に不機嫌になった。

利夜とは違い、殺戮自体を楽しめる趣味は持ち合わせていない。

しかも、青い髪呼び名は非常に不愉快でもあった。

「人の名をよくも好き勝手に呼ぶものだな。」

つまらない相手ばかりで、つまらない事ばかり云う。しかし、逸れ者なら知らぬ者が居ないと云われる迄になった、その仕事は、きちんと果たした砂久弥だった。

さつさと片付けてしまうに限ると彼は思い、その通りに実行して、砂久弥は嘆息した。

これを締めとするには、随分とつまらない相手だったからだ。やはり最後には腕の立つボスキャラに出現して欲しい。

無い物ねだりを砂久弥は内心願いつつ。

「まあ、いいか。」

と、呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6208x/>

---

～猫被り姫に魔王退治の王子様～

2011年11月29日02時02分発行